378
820

始

特230
309

片桐龍子著

眞生命の光

忠誠婦德會發行

著　　者

眞生命の光目次

生立の巻

家門の譽……一一
澄江の誠心……一三
滿つれば缺くる……二三
月に祈る……二八
社頭の夢……三三
神性……三七
玉の聲……四〇

皇軍聖戰必勝武運長久祈願

惠那郡武並村陽光ヶ丘にて

栴檀の實……四六
慈心仁心……五一
聖少女……六〇
恩師の心……六五
母の心配……七〇
父の教訓……七三
神童の面影……八〇
眞珠の光……八三
非凡の力……八五
浮世の夢……九五
樂しき旅路……一〇一
哀憐の涙……一〇四

救ひの手を伸べて……一一五
婿選び……一一九
離れ行く心……一三〇
神風……一三三
聖女の魂……一四三
靈峯の月……一四六
滿つる白雲……一五四
雲上の旅……一五七
下界の姿……一六二
變る風俗……一六六
變らぬ眞心……一六九
靈夢より醒めて……一七二

懷しき家……一七六
父母の聲……一七九

修養の卷

春の野……一八七
嵐の日……一九二
老母の悶え……一九七
新生命……二〇三
慕ひ寄る人々……二〇七
寶島……二一一
浮べる淨域……二一四
學生の生活……二一九

神か人か……二二三
懷しの故郷……二二七

聖教の卷

聖女の瞳……二三七
天恩……二四三
親と子……二四七
天と地……二五三
天祖の御稜威……二六〇
大宇宙の御光り……二六二
神の子……二六九
天つ神の御發生……二七〇

天照皇大神……二七二
八坂瓊曲玉……二七四
八咫御鏡……二七六
天叢雲劍……二七八
保食の命……二七九
天孫降臨……二八五
皇位燦然……二九一
世尊と祖師……二九四
體と食……三〇四
古代の衣服……三〇六
天道を離るゝ人々……三一一
人と病の種……三二〇

眞の幸福の種……三二七
病と醫藥……三三二
病人と手當法……三五〇
癒能力と生命……三五七
自然と人生……三六二
眞の財寶……三六六
全人類の幸福……三六九
旭の御旗……三七五
痛ましき民族……三七六
支那民族の發達……三八〇
聖者の敎日の本に薫る……三八四
惡魔の戰……三八六

王道樂土……三九〇
運命の子……三九三
鉾先を變へて……三九四
誤れる政策……三九七
亡國の種……四〇一
正義の魂……四〇五
天魔の襲來……四〇八
世界の動向……四一一
國民の覺悟……四一四
聖の御代……四一七
筆を擱くに當りて……四二一

序文

麗はしく輝かしい、我が生命の生きる世界を天馳けるも一瞬の夢、暗黒無冥の世界に入りて呻吟苦惱するも、亦一時の夢、同じく人としての生命を享け乍ら、天地の隔たりある心の世界の境遇に生きるも遊ぶも、現し世の夢でございます。

人間の世界にこそ、あらゆる不思議奇蹟靈夢と、樣々の現象が現はれて、人の心と境遇を支配するといふ事も、これ又人の世の習はしとして、後世も絶ゆる事はございますまい。

著者も假初の命を享けて、夢の世の一時に生きる、小さな生命でございます。

ために天地無窮にして宏大無邊なる、神の世の御業及び、萬世の出來事等については、假初にだにも、知る由もありません。

それのみか、我が身の間近に起つてゐる、明らかな出來事さえ、明確な認識を缺く樣な、愚かな者でございます。

ために人の世に生を享けて、今日の日迄諸々の恩德を諸天諸佛から受け、大君樣から、又世の人々から宏大無邊な恩寵を蒙り乍ら、これに報ゆる事の出來ない無力さを嘆く、小さな生命に外なりません。

それでゐて、力なき我と知り乍ら、御恩德の萬分の一にも報ひ度いと、藻掻くのが、私の常の心でございます。

この心が過去に樣々な望みを生じて、絶間なく自己だけは身に及ぶ限りの、報恩感謝の務めだと信じ切つて、行ひ進んで參りました事が、果して世の中の人のために、是であつたか、非であつたか、私自身に判斷はつきません。

唯それは世の中の魂の純眞な人と、神樣の御批判にお委せするより外に、道はございません。

命のある限り、報恩感謝と報國の念に魂の燃ゆる私は、矢張りいつになつてもじつとして世

の中を見凝めてゐる事は出來ません。

この肉體に血潮が漲つて、宇宙から滿されて來る魂に、强く支配されてゐる限り、矢張り止むに止まれない、念力が口に表はれ、筆の先に迸つて來る事は、どうする事も出來ない現象でございます。

故に願はくは、我が生命から迸り出づる力が、世の人の心身を誤らせ汚す事なく、幾分でも愛する地上の同胞の魂を清め慰さめ、眞の幸福を齎すためになれかしと念願しつゝ、筆を走らせる言葉の種を、宇宙から祈り求めてゐるのでございます。

著者が本書に筆を執る事になりました動機は、唯不思議といふより外に言葉はありません。

この春御國の華誌上に、數年間に涉つて、連載致しました、歷史小說寶城を發行する事に決心して、全國の會員に發表し、眞面目な態度で筆を執りましたが、どうした事か、途中から絶對に信念朦朧として、思想が纏らず、筆が進まず、遂に原稿を完了する事が出來ませんでした。

かうした創作には、可なり長い體驗を持つ自分として、有るまじき現象に、我乍ら驚きまし

て、幾度か場所を變へ、身を淨めて、心氣を一轉し、信念を纏めて筆を執つても、矢張り氣力が續きませんので、とう〳〵筆を投げ捨て、事實のまゝを、豫約會員に訴へて、寶城發行を中止させて頂きました。

けれども會員とのお約束を、無視する事は出來ませんので、秋には是非共寶城を發行し度いと、一心に願つて居りました。

所が七月十八日陽光ケ丘の頂きで、世にも不思議な神秘が現れ、靈夢の中に聖敎の寶卷を授けられました時から、驚くべき神氣が、體内に發動致しまして、朝未明に起きて御神殿に上り東に向つて朝日の昇天を待つて、瞑目して祈つて居りますと、忽ち心身爽快になりまして、魂に天の聖靈が滿たされて參ります。

さうして外なる神か、中なる我か知らず、何か不思議な力が「天祖の聖敎を受けて、眞生命の力の種を、世に移し分けよ。」と頻りに急き立てられる聲を、はつきり聞きますと、じつとしてゐられなくなりました。

さうして筆を執ると、無意識に紙の上を走つて、我が知惠に非ざる言葉が、目の邊り現はれて來る事を覺えました。

これ明らかなる天のお示しと、深く悟りましたゝめに「眞生命の光」といふ、お示しそのまゝを、本書の名と致しまして、無我夢中の間に、本書を書き上げて終ひました。

ために内容が充實してゐるとか、又は調つてゐないとかいふ事は、御覽になる方の御批判にお委せする事に致しまして、私は自ら一言も言譯など致し度くございません。

若し左樣な事を申しますと、御神意を冒し奉る樣な事になりますから、これ程恐れ多い事はないと感ずるからでございます。

かゝる事情で、突發的に書かせて頂きました本書でございますから、眞心を以て御覽下さる方は思ひがけない、靈光をお受けになりまして、價知れぬ生命の寶を、はつきりお掴み下さるのではないかと存じます。

何卒賢明なる本書愛讀者の皆樣におかせられましては、文章の巧拙などゝいふ樣な事は問題

にして頂かず、唯内容に如何なる力が盛り込まれてゐるかといふ一點にだけ眞心を集中して、御細讀下さいまして、萬一諸賢の眞の生命の御修養のための、一端の光りともなり得ましたならば、著者の光榮之に過ぎるものはございません。

本書を御覽下さる方は、何れも必ず夢の世界、幻の中を行くといふ樣な感を、深くお受けになる事と思ひます。

それは著者である私が、聖靈のお導きに依り、又靈夢の中にありまして、魂が働いてゐたゝめでございます。

文章を和やかに、讀みよくするために、物語り式に書いてございます。

主人公は靈夢の中に現れた姿の人でありまして、決して私の本體でも本性でもなく、實在の人ではございません。

全く靈夢の中の聖女でございますから、その點よろしく御含みおき下さいます樣お願ひ致します。

前にも申上げました樣に、本書は全く靈夢に依つて、筆を執りましたので、人として想像の出來ない樣な光景を描寫してある個所が、可なり多いと思ひますが、それだけに讀む人が眞心から深く信ずれば、必ず靈光をお受けになる事が出來ると信じます。

眞に天の聖靈のお導きであれば、全知全能の力が描寫されるのは、當然でありますが、愚痴朦朧な著者の心の鏡が曇つてゐますために、殘念乍ら、總ての天の眞力の靈光を映し取る事が出來ませぬのは、慚愧に堪へません。

誤つた點は、著者の不明の罪として、お許し下さいます樣、特にお願ひ申上ます。

昭和十二年盛夏

著者・記す

眞生命の光

生立の巻

家門の譽

後に美しい山を負ひ、南は海に面した八幡村は、神代の頃八幡明神が、天祖の御神勅を受けて、この島に降臨され、土地をお開きになつたといふ、神秘的な傳說が、今も傳つてゐます。だからこの島は、何處の村のも、總て八幡神社を氏神様として、嚴かに祀つて居ります。

八幡村の素封家、八幡國彥の家は、祖先がこの島を開拓以來、神ながらにその系統を受けてゐるので、何代續いたといふ樣な短い歷史ではなく、開闢以來氏神の御神統を受けた、名門として人に知られてゐます。

それだけに代々の祖先から、積善の誇高く、餘德は次々に光り輝いて、八幡家に生れた者は、昔から海を渡つて本土へ行つて、色々な方面に活躍し成功して名を擧げてゐる人が多く、又遠く海外へ渡つて、殖民地の開拓に盡力し、堅固な基礎を築いてゐる人も澤山あります。

當主國義は祖先からの清き血を享け繼いで、天來備る品性人格も高く、優れた知能も才智も自ら備つてゐますが、それでゐて非常に性格が圓滿で穩健であります。

ために村内は言ふ迄もなく、近郊の人々にも尊敬され、村長、縣會議員その他重要な職は、否應なしに押つけられて、二十に近い名譽職を勤めてゐます。

家門が古いだけに、土地も澤山持つてゐて、年々得米五百俵も治り、それに海から上る所得も大きなもので、年收數萬を越えると言はれてゐます。

しかしそれだけに、村の事、社會事業等には、進んで提供しますので、今では財産が殖えて行くといふ事はありません。

八幡家では、三代前の戸主の國臣が、八幡家の家憲といふものを作りました。その家憲では、これから後は入幡家の財産は、現狀維持に努め、君國の御爲、必要に應ずる場合でない限り、決して現在の財産、卽ち田畑を賣り又買はぬ事。

財政は入つたゞけの實收入を、同じだけ支出して有効に財力を生かして働かす事が最も大切である。

と定められてゐます。

それを第一要項として、その他細々した事が、手落なく、個條にして定められてあります。

尙家訓として大切な事は、萬一八幡家の戸主に子なき場合は、最も系統深き近親者の中、優良なる男子を入れて相續せしめる事。

といふ事も定められてありました。

これは數代前に、相續者が出來ないために、他から養子を入れて、相續せしめた事が二回程あつたからでございます

澄江の誠心

現戸主の嗣子國彥の妻は、隣村宮田村の素封家から迎へられて、名は澄江と呼ばれてゐます。

至つて溫良貞淑で、その上才智に長け、容貌も人並以上美しく、嫁いで來た日から、兩親にも懇ろに仕へ、夫にも忠實に、近所親戚の人達とも、眞心から親んで、八幡家の嫁として、申分のない出來榮と賞められ又尊敬されて居りました。

父の國義も母の信江も喜んでその事をよく人に語るのでした。今日も來客に、

「何處の家でも嫁を迎へると、當分の間は、家風に合はぬため、お互に辛抱して、餘程讓り合つても、圓滿に行かぬものでありますが、うちの嫁の澄江は、誠に出來のよい娘で、來た日から、うちの人になり切つて、實家の事などは、一言半句も口にせず、どんな事柄も、それはそれは些細な事迄、

「お父樣、これはどう致しませう。」

「お母樣、これはどういふ風に致しましたら、よろしうございませう。」

と尋ねますので、一度敎へてやると、ちやんと工合よく取計らつて呉れますので、本當によい嫁だと喜んで居ります。」

客來は平常の事をよく知つてゐますので

「本當にお仕合せな事でございます。

どちら樣でも、お嫁樣がお入りになると、色々な揉め事が出來て、餘り面白くない噂の立つ事が多いのでございますが、お宅樣では親御樣の貴方樣方が御理解が深く、德望が備つてお出でになる上に、若旦那樣が、あの通り、御立派な方ですから、その筈でございます。

それに若奥樣があゝしたお立派な、お心掛のよい御孝心の深い方でゐらつしやいますので、御圓滿でお羨しい事でございます。

若奥樣の御生家も、あゝした名望家でお有りになりますから、色々と家風がお有りになりませうに、さうしたお宅にお育ちになつた若奥樣が、こちら樣へお出でになりましてから、お實家の事を仰有らず、こちらの家風ばかり、一生懸命でお馴れにならうと、お努めになるのは、本當にお心掛のよい、感心な事でございます。」

信江はにつこり笑つて言ひました。

「本當に自分の嫁を賞めては可笑しいか知れませんが、うちの澄江位優しい娘は多くはございますまい。

生みの親御がしつかりしてゐられたゝめもございませうが、この家へ參りました翌日、私共二人の前へ參りまして、淑かに手を突いて申しますのに、

「お父様、お母様、誠に尊い御因縁を結んで頂きまして、神様佛様のお蔭で不束な私がこちら様の嫁として迎へて頂きました事を、有りがたく存じます。

生れつき、愚かな者でございますのに、身を入れて、修養も致しませんので、何一つ眞面目な仕事も出來ません、不束者でございますが、これからは力の及ぶ限り、一生懸命で八幡家の家風を覺えさせて頂きまして、嫐ては八幡家の相續者の妻としての務めが充分出來ます様に、努力致し度いと存じますから、お父様お母様も、他家から參りました嫁と思召さないで、御自分の本當の生みの子と思つて頂いて、何事に依らず遠慮なくお言付下さいまして、又行屆きませぬ點は、御容赦なくお叱り頂きまして、お導き下さいます様に、お願ひ申上ます。」

とかう挨拶致すのでございました。

「左様でございますか。

初めから、他家のお嫁さんとは、決心が違ひますのですね。」

「それだけではございません。

うちの嫁は、來ましてから八年になりますが、その間實家へ歸つた事は、五回しかございません。」

「八年間に五回？　それは又どういふ事でせう。

新嫁さんの時代は、誰でも一年に五回位は歸り度がるではございませんか。」

「さうでございます。

それが又本當の様でございますが、うちの澄江は違ひますの。

あれはかう申すのでございます。

生れた實家は懷しうございます。肉身の親も兄弟も親切にして、行けば喜んで迎へて呉れますけれども、實家は私のためには假初の家で、これ迄大きく育てゝ貰つたのでございますから、御恩は深うございます。

その御恩に酬ゆるのには、私がこちら様の嫁となつてから、本當によい嫁として、御兩親様や良人に可愛がられ、御近所や親戚の方から、信用して頂いて、圓滿に嫁の務めが出來ると

いふ事を見て頂いて心から安心して頂く事が、兩親や兄姉に對する、萬分の一の御恩返しだと存じます。

だから家を出ます時、私はその覺悟で參りましたので、嫁ぎました日から、こちらが本當の私の永住させて頂く、因緣深い大切な家でございますから、餘り度々家を明けて、實家へなど參りまして、身嗜みを忘れたり、不規則な生活を覺えては、身のためにならぬと思ひますから、よく〳〵の用事がない限り、歸らせて頂かないでも結構でございます。」

と申すのでございます。

だからあれが實家へ歸りましたのは、妹のお嫁入りの時と、御祖先の御法事の時二回と、親御さんの病氣の時と、初客の時とそれだけでございます。

實際しつかりした心掛の嫁でございますよ。」

と得意氣に話しました。

「全く感心なお方です。

その事は今初めて伺ひました。

それでこちらの若奥樣は、こちらへお出でになつてから、お實家の事は何も仰有つた事はありませんか。」

「實家の事は、一言半句も言つた事はありません。

私が時たま、「來客の時又、お盆や法事の時に、佛樣へお供へなどのお料理はお前の實家ではどういふ風になさるのか。」

と尋ねますと、あれは笑つて

「實家は實家で、昔からして來た家風がございまして、母が嫂によく申しつけまして、色々して居りますが、私はそれを手傳ふ位で、はつきりした事は覺えても居りませんの。」

と言つて居ります。ちやんと何も彼も承知してゐて、知つたふりをしないのです。」

と今度は國義が答へました。

「本當に感心でございますね、誰でも實家々々と、實家の事は自慢してよく言ひ度がるものですのに。」

「それでゐて、うちでは何をさせても、例へば御飯を炊くにしても、お惣菜を煮るにしても、

經濟の事も味の事も、それはよく氣をつけ、研究して、冗なく上手にやつてゐます。
漬物などでも、よく若いのにこんな上手にと、驚く程加減よく漬けて、私達にも、おいしく食べさせて呉れます。
それに尙感心な事には、親戚や近所や始終出入りをする人達に、始終盆正月などの屆け物をする時も、その場だけの體裁を繕つておくといふ樣な事はしません。
一々相手の家の境遇、家業、性質、うちとの關係等もよく考へて、その家その家に向く樣なものを、年寄があれば年寄の喜びさうなものを、子供の多い所へは子供の者を、家計の苦しい所へはその樣に、それは〳〵眞心を行屆かせて呉れます。
それで嫁が來て三年もたゝぬ中に、家内も私も嫁があれだけしつかりしてやつて行くのだから、何も彼も委せ切つて終つて、やらせやうじやないか。
なまじいあれこれ言ふと、やり惡からうと相談して、一切嫁にうちの中の事、交際の事などを委せましたので、早く樂隱居になれて、家内と二人で、暇さえあれば時々各地の名所見物や、神社佛閣にお參りして、命の靜養をさせて貰つて居ります。

本當に私共は仕合せだと、有りがたく思つて居ります。」
「お羨しいお身分でございます。」
「嫁ばかり賞めておかしい樣でございますが、どんな疲れた時でも、夜になれば、愛想よく私達二人の肩を擦つて呉れない事はありません。
お湯の世話から、寢床の世話迄、若い私共のために心配して呉れますので、今時の嫁には珍らしいと言つて、主人と二人で喜んで居ります。
無理にも叱言や不滿を言ふ種がございません。」
「それだからこそ旦那樣も奥樣も、有難い勿體ないと、口癖の樣に仰有つてゐられるのでございます。
何よりも御結構な事でございます。」
「あはは〳〵、それは嫁のせいばかりじやなく、天皇陛下や御祖先樣や天地の諸神諸佛のお蔭です。
それを思ふからつい、有難い勿體ないといふ言葉が、口に出るのです。」

「所が普通の人では、貴方の様に、本當の感謝の念が、心の底から出ないのです。現に私共でも、かうして尊いお宮に仕へさせて頂いて居りますから、誰よりも一番純眞な徹底した信仰を持つてゐて、人様の手本にならなければとよく氣付いてゐ乍ら、時々自分で恥かしいと、我が心に恥ぢる様な行ばかり繰返してゐます。

こんな事ではうちの妻や子を治めて行く事も難しいと思ひますが、どうする事も出來ないのです。

「どう致しまして。

貴方のお宅では、貴方も奥さんもしつかりしてゐらつしやるから、自然御兩親のよいお躾で、子供衆も皆、素直なよいお子達ですから、お仕合せでございます。

その事は私共も常に感心して居ります。」

「飛んでもない事、そんな事を仰有つて頂きますと、身の置場もございません。

親が不出來ですから、子供も親に似て、どうも不精な子供ばかりで、お恥しうございます。」

「いゝや、そんな御謙遜はいりません。

皆さん、いゝお子様ばかりでお羨しいと、悴も嫁も始終申して居ります。」

滿つれば缺くる

「さう仰有れば、お宅様でも、もうお一方位お子様がお出來になつてもよい頃ですね。」

「實はうち中が、そればかり待つてゐるのです。

悴も眞面目で、内外共によく働いて呉れますし、嫁は申分ございませんし、何一つ不足といふものはございませんが、唯孫が出來ませんだけが、一家中の悲しみと言へば言へるのです。

殊に年が寄ると、孫の顔が見度うてたまりませんのです。」

「御尤もでございます。若奥様と同じ位に來られた方でもう三人も有る人があります。

御體格も相當御立派ですし、いつも御健康でお出でになる様でございますのにね。」

「さうでございます。

嫁はうちへ來ましてから、一日も病氣したなどゝいふ事はありません。それは〳〵丈夫なの

ですし、怜もいゝ體をして、健康なのですが……。」
「矢張りこればかりは授かりものでございますから、矢張り御祖の神様のお德を受けなければ、出來ないものでございませう。」
「さうでございます。
人の力ではどうする事も出來ません。若しかするとうちには孫は授かつてゐないかも分りません。」
「でもお宅様では、若しお出來にならない時は極近い肉身の方から、一番よい子をお貰ひになる事に決つて居りますので、その方の御心配はお有りになりませんから、結構でございます。」
「それでも矢張り、貰つた優れた子より、うちで生れた子の方がずつと頼りになれるのですから、それに越した事はございません。
それで私は家内にも、怜にも嫁にも、孫の催促をした事はありませんが、自分では朝夕孫をお授け頂ける様にと祈つてゐるのです。」
「それでは時々神社佛閣御參拜に、お二人でお出かけになるのも、さうした御心願をおこめに

なるためですか。」
「いやさういふ譯ではありませんが、靈地へ參りまして、あらたかな神社やお寺へ參りますと、遂心に思ふ念願が、口へ出てお願ひする事になるのです。」
「それは御尤もでございます。
それが人情の常でございますよ。
まあこれは長い事御邪魔致しまして、失禮致しました。」
「嫁が出拔けて居りまして、何のおかまひも致しませず、お話にばかり夢中になつて居りまして、申譯もございません。」
「いや、それどころではございません。
では失禮致します。有り難うございました。」
客の八幡神社の社掌は、歸つて行きました。
後見送つた二人は、
「明月さんは心に裏表のない、さつぱりとしたよい人だ。」

「ほんとにさうでございます。
お話を承つてゐても、心持がよろしうございます。」
「あゝいふ人だから、八つもお宮を受持つてゐても、村の人達に尊敬されるんだ。」
「本當でございますよ。
世の中も、あんな方ばかりでしたら、住みよいものでせうが……。」
「あはは、、、。しかし世の中は惡い人があつて、善い人の價値が分り、賣る人があるから、
買ふ人があるのだ。
何でも世間の事は、反對に〳〵組立てられてゐるのだからね。」
こんな和やかな話を兩親がしてゐる時、澄江がいそ〳〵として歸つて來ました。
澄江は父母の部屋の前迄來ると、淑かに手を突いて、
「お父樣、お母樣、只今歸つて參りました。」
「おゝ早かつた。外は暑かつたでせう。」
「買物も澤山だから、えらかつたゞらう。千代はどうした？」

「千代は荷物が澤山でございますので、休み〳〵後から參ります。
私はお客樣でもあると、又お母樣に御迷惑をかけると思ひまして、持てるだけの荷物を持つて、先に急いで參りました。」
「そんな心配はいりませんよ。二人もして留守居をしてゐるんですから。」
「お客樣とて別になかつたが、悴に用事があるとか仰有つて、お宮の明月さんが來られて、暫く話して今お歸りになつた所だよ。」
「さやうでございましたさうですね。
只今そこでお目にかゝりました。明月さんがその時、面白い事を仰有いましたのでございますよ。」
「まあ何を言はれたの？」
「あのねお母樣、明月さんが私に、本當の親孝行をして上げて下さいませつて仰有るのでございます。
私は吃驚致しまして、本當の親孝行つて、どんな事をするのでございますかつて伺ひまし

たら、可愛いゝお孫さんを、御兩親に抱かせて上げて下さいつて仰有つて、さつさと行つてお終ひになりました。ほゝゝゝ。」

「さうか。今その話をこゝでしてゐたものだから、お前の顔を見て、つい冗談を言はれたのだらう。」

「私本當にお父様やお母様にすみませんわ。」

「何を言ふの。お前は。」

「私こんなに大切にして頂き乍ら、子供を生む事が出來ないのですもの。」

「そりや仕方がない、人間業では、どうにもならない事だから……。」

三人共和やかながら、淋しく笑ひました。

月に祈る

九月十三日、空は晴れて、一點の曇りもなく、美しい月が東の空から上つて、何とも言はれない夜です。

緣側の障子を明けて、月見團子やすゝき萩、その他をお供へして、お祭をすますと、國彦は庭に面した表座敷の緣側に腰かけ乍ら、のび〳〵した心持になつて、傍に坐つてゐる澄江に向つて、

「いゝ月だね。」

「本當によいお月夜様でございます。」

「滿月もいゝが、今夜の様にまだ少し缺けてゐる月もいゝものだね。丁度うちの様で。」

澄江は國彦が何を言ふのかと思つて、

「何でございますの？」

「この月を見ると、丁度うちの様だとふと考へたのだよ。」

「何故でございますの？」

「でもお前、考へても御覽、うちでは兩親も揃つて仲よく、うちのために盡して呉れ、又時々打揃つて今の様にお參りに行かれる。

私達も二人共健やかで、何一つ不足といふ事はない。
何も彼も感謝すべき事で滿ちてゐるけれど、唯大切な子供の出來ない事が、物足りないじやないか。
兩親だつて屹度、口では言はぬけれど、心で待つてゐられるだらう。
だから私達も、子供が出來たら、十五夜の樣な家庭になると思ふのだよ。」
澄江はさう言はれると、如何にも申譯ないといふ樣な表情に變つて、
「私……本當に申譯もございません。私はどうしてこの體格でゐて子供が授からないのでございませう。
それを思ふと情なくなります。」
「それはお前にばかり罪がある譯じやない。
私に父となる資格がないんだらう。」
「いゝえ勿體ない、屹度私の體の何處かに缺點があるに違ひございませんわ。」
「でもお前は一度も病氣などした事がないじやないか。」

「はい、でも人並に子供の出來ない所を見ると、何處かに缺點があるものとしか考へられません。」
「そんな事はお與へだから仕方がないよ。
今一、二年待つて見て、出來なかつたら、叔父の家の子でも貰つて來て、懇ろに育てやうじやないか。」
「はい、出來ません時は、さうするより外仕方がございませんけれど、出來る事なら、貴方の實の子の出來ます事を、お父樣もお母樣も、心から念じてゐらつしやいます。
だから私、それを思ひますと、お父樣にもお母樣にも貴方にも申譯ないと思ひますの。
ですから始終、八幡樣に祈願して居ります。」
「八幡樣にお願ひしたつて仕方がないよ。八幡樣はお前、子供を授けるお仕事をなさる神樣じやないんだから……。」
「だつて尊い〳〵御先祖樣ですもの。
一心にお願ひすれば、授けて頂けるかも分りませんわ。

ですから私……毎晩一人で八幡様にお願ひに行くのですわ。」
「それは何時頃行くの？」
「夜分でございますわ。貴方やお父様やお母様がお寢みになつてから、一人でこつそり參りますの。」
「さうか、よく遲く部屋へ入つて來るから、毎晩決つて何をしてゐるのかと思つてゐたが、お參りに行つてゐたのか。」
「人に見られては變に思はれますし、夜更けてから參りますと、しんとして、晝間より一層莊嚴な心持が致しますもの。」
「さうか、それは偉いよ。至誠は天に通ずるといふから、或は神様も、お前の願をお叶へになるかも知れない。
だがお前一人がお願ひして授かつた子は、お前だけに懷いて、私に親しまない樣じや、變な事になるから、今夜は一つ私も一緒にお參りに行つて、お願しやうかな。」
「まあ本當に貴方もお詣りして下さいますの？」

「あゝ行かう。」
「有りがたうございます。」
「その前に澄江、二人でこの澄み切つた美しいお月樣にお祈りしやうじやないか。」
「それが大切でございますわね。
清らかなあのお月樣の樣な、子供が授かりましたら、そんな嬉しい事はございませんわ。」
澄江は緣側の端へ來て夫と共に手を合せ、一心に祈るのでした。

社頭の夢

八幡家から三丁程坂道を登ると、幾百年もの年を經た老杉が、森々と生茂る、こんもりとした八幡神社の森がございます。
右側は美しい小川が流れ、東は野路へ續いて、下は村になつてゐて、チラ〳〵と此處彼處に燈火が洩れてゐます。

南の海邊では音律正しく波がどう〳〵と打寄せては、返してゐます。
漁り火も一つ二つ見えてゐます。
中天には十三夜の月が、皎々と地上を照して、本當に神秘的な夜です。
立て罩めた老杉の林の間から、微かに月の光りが洩れて、社頭を照してゐます。
澄江は社頭の圓座の上にきちんと坐つて、一心にお祈りをしてゐましたが、どうした事か、
次第々々に頭を下げて、遂に地面へ俯伏して終ひました。拜んでゐるのか、眠つてゐるのか、
暫く頭を上げません。
後から來た國彦が拍手を打つて、清々しい聲で祝詞を上げて、禮拜が終つても、まだ澄江は、
立ち上らうとはしません。
國彦は審しく思つて、傍へ近寄り、輕く肩を叩いて、
「澄江々々〳〵どうしたのだ。」
と聲をかけました。
澄江ははつとしたらしく、頭を上げて、

「まあ、貴方。」
「どうしたのだ。こんな所で突伏して終つて？」
「はい 私 只今夢を見ましたの？」
「何？夢を見た？ じや眠つてゐたのか。」
「いゝえ、 私 眞劍で祈つて居ります中に、自分が何處にゐるのか分らなくなつて終ひました。
すると お宮の中から、大變美しい雲に載つて、神功皇后樣の樣な、尊い女神樣が、眩しい樣
な甲冑をお召しになつて、澤山のお供の神樣と共に 私 の目の前に現はれて、
「我は汝の祖先である。今から汝の念願に依つて、子寶を授けるから、大切に育てよ。
この子成人すれば、神の靈氣を受けて、世の救ひ主となつて、光りを放つ。」
と仰せになつて、美しい玉をお授け下さいましたので、有りがたく思ひまして、兩手でお受け
致しましたが、どうしてこの玉をうちへ持つて歸らうかと思ひますと、神樣が
「その玉を直ちに呑め。」
と仰有いますので、仰せの通り口に入れますと、體中が清々〳〵しくなつて、虛空に舞上つた樣な

心持が致しました。
その時貴方に呼ばれて、正氣にかへりましたの。」
「それは素晴らしい夢だ。
昔から正夢といふ事がよくある。
殊に八幡樣の御社前で、さうした不思議な夢を見るといふ事は、子寶をお授け下さるといふお告げかも知れぬ。
兎に角有難い事だから、よくお禮申上げて歸らう。」
と二人は社頭に竝んで、一心に祈願をこめてから歸つて參りました。
と、不思議にその月から、澄江は姙娠の徵候が現はれて參りました。
二ヶ月目に專門の醫師の診斷を受けると、完全に姙娠だといふ事が分りました。
それを聞くと兩親始め國彥も、まるで寶の山でも見付けた樣に、有頂天になつて、
「偉いぞ澄江、これでうちも子孫代々安泰だ。」
「全く奇蹟です。天佑です。」

「矢張り正夢でございました。」
兩親は嬉しさの餘り澄江に言ひました。
「これは神樣からのお授け子だから、塵程も粗末にしては勿體ない。私達もよく注意するからお前達も充分注意してお呉れ。」
「一生懸命でよい子を生みます樣に、注意致します。」
「孫が欲しいばかりに、氏神樣だけでは、承知がならないで、日本中の神樣佛樣に無理なお願ひをしたけれど、矢張りお授けが頂けたのだ。こんな有難い事はない。
澄江體を大切にして、よい孫を生んで呉れ。」
母の信江は一生懸命で澄江の體を、前より一層大切にして、軈て生れて來る、可愛いゝ孫を待つのでした。

神性

澄江は今年二十八、智恵も力も女としては、一杯満ちてゐる女盛りです。

國彦は三十五といふ、血氣盛りの青年です。

この健全無比な兩親を持つ子に、不純な子の生れやう道理はありません。

澄江は私が體内に、子供が授つたといふ事を知つた時、殊に八幡神社の社前に於ける靈夢の事を思ふと、尊い神の授け子といふ信念がしつかり魂に浸み込んでゐますので、我乍ら嚴かな氣持になるのでした。

神の子を生むと思ふ時、重大な責任を感じました。

國彦の思ひも同じです。

長い事待つた我が子が、神の授け子として生れて來る事を思ふと、その幼子が萬一體が弱かつたり、魂が曇つたりしてゐて、眞の神の子として、又人間としての生命の力の弱い子であつては、祖先にも父母にも申譯がない、子孫も榮えぬ事になるし、君國に對しても、社會に對しても申譯がないと思ふと、父としての責任上、如何にしても、よき子を澄江に生ませ度い念願から、目に見えぬ神を祈らずにはゐられませんでした。

そして人知れずあらゆる方面から、子供を生み育てる父母のための書物を取り寄せなどして、一心に熟讀し、重要な個所には、赤線など引いて澄江に讀ませ、父として大切な事は、自らそれを守つて、澄江の心を苛立たせ、塵程も不安を感じさせる樣な事もなく、父母と協力して、食物の事、その他萬端よく注意を與へ、周圍感情等について、常に圓滿な清々しい豐かな人情にふれる樣に氣をつけ、少くとも澄江の感情を害し不安な心持を起させる樣な事は、努めて澄江の周圍から遠ざける事に努力しました。

澄江は嬉しさの餘り、勿體な過ぎる程の兩親や夫の心遣ひ慈悲情に、人知れず感謝の涙にむせびつゝ、

「良い子を生まなければ、兩親に夫に申譯がない。」

と思ひ、自分の力で及ぶ限りの事は盡し乍ら、尙及ばぬ事は天地の神佛の加護を、瞑想して祈るのでした。

澄江の母體としての胎教生活は、

朝は必ず未明に起きて、心身を淨め、神佛に禮拜し、嫁としての務めを朗らかな清々しい心

持で一層よく果し、兩親夫には眞實の眞心からよく仕へ、親戚隣人には親切に、出入の者には情をかけ、天恩物を大切に尊んで、それこそ一粒半粒の米も冗にする事なく、一滴の水も心から感謝する心持で、日々の食事にも注意して、體を健全にして、充分に榮養を取り、安眠して攝生を守りました。

かうしてうち中の者が、總動員で力を盡した甲斐あつて、十月の月日も順調に過ぎ、翌年六月十八日に、澄江は安々と女の兒を生みました。

玉の聲

福德圓滿な家庭として、世間の人々から、羨望の的となつてゐた八幡家も、久しい間、若夫婦の間に、子供の出來ぬといふ事が、唯一の足りなさとして、折々和やかな家庭に、一抹の淋しさを感じさせ、又世間からも

「八幡さんのお宅に子供さんのないだけがお氣の毒だ。」

と噂の種になつてゐました。

その八幡家に、若夫婦が結婚して九年目に、玉の樣な女の子が生れたといふので、大變な騒ぎです。

しかし世間の人は申しました。

「大きな聲では言はれぬが、男の子なら八幡さんのお宅も滿月だが、女の子では折角だけれど、幾分物足りない氣がなさるでせう。」

「いや、出來かけたら、これから幾らでも出來る。お二人共まだ若いんだから……」

「旦那樣が三十五、奥樣が二十八で、どちらも若盛りだから……。」

「さう言へばさうだけれど、しかし今の子は家内中の信心に依る、八幡樣の申し子だつて言ふじやないか。」

「さうかも知れぬ。」

一寸見ても眼付きなんか、神様かと思ふ程美しく光つて、顔の相でも、普通の赤ん坊の様ではなく、神々しい相を持つて居られる。本當に滅多に見られぬ、美しい可愛い赤ん坊だよ。」

「その子も又大きくなると、親御の様に、優しい立派な方になられるのだらう。」

「だが今度は、八幡さんの所も養子をしなければならぬのかな。」

しかし八幡家では、

「神様の授けて下さつた子だと思へば、有難い。

うち中で心も體も眞直に清く丈夫に育てなくちや、お授け下すつた神様に申譯がない。」

とそれこそ總動員で、赤ん坊の養育に力を注ぎます。

世に名の聞えた名門の家柄といふ程ではありませんが、この界隈では、他に比較する家もない名望家としての八幡家でありますだけに、外の家と違つて、一人世嗣が生れたといふ事だけでも、非常な騒ぎでございました。

それだけに又、祖先の名を汚さない、世間に恥ぢないだけの教育はしなければならないといふので、家内中揃つて責任觀を持つといふ事は、寧しろ當然な事でございました。

八幡家の人々では、今の場合、この當然の事だけでなく、神様の申子であるため、御神意に叶ふ様に育てなければならないといふ、強い信念を持つてゐました。

生れた子は世を照す神の御稜威の如くといふ意味で、照代と名付けました。

この照代は母體の中にある時から、兩親や夫は、驚く程細い所迄注意して澄江の精神的修養に注意するばかりか、日々の食事に心を配る事は、大變なものでした。

兩親や夫が箸をつけないもの迄、澄江には此處彼處から集めて來て侑めますので、澄江は辭退して、

「まあ勿體ない、お父様やお母様や旦那様さえ召上らない物を、私が嫁の身分でどうして頂けませう。」

と遠慮すると、信江は優しく、

「お前自身が食べるのだと思ふから、そんな遠慮心も出るのだが、私達が心遣をするのは、お前だけが可愛くて食べさせ度いといふのではない。

お前に食べて貰つた食物が、軈て可愛いゝ孫の體になつて生れて來るのだと思ふと、まだ見

ぬ中から、丸々として肥つた、丈夫な玉の様な赤ん坊を生んで貰ひ度いと思ふからですよ。」

「さうだよ澄江。

榮養の多い、うまい御馳走を澤山食べて、骨も肉も人一倍しつかりとした丈夫な玉の様な孫を生んで呉れ。」

國彦は笑つて、

「お父さんやお母さんにこれだけ應援されては、澄江もいよ〳〵日本一の赤ん坊を生まねばならぬ、重大な責任がある譯だよ。」

「おほゝゝゝ。大變でございますわ。そんなに皆様から御心配を頂いては……。

でも私本當にお父様やお母様に、屹度喜んで頂ける様な、丈夫な赤ん坊を、自分では生むつもりでございますわ。」

と誓つて、力の及ばぬ所は、神佛に祈るのが日々の澄江の生活でした。

胎教にさへ家内總動員だつた赤ん坊です。

生れてから眞劍になるのは、少しも不思議ではありません。

「澄江、おいしくて滋養になるものを澤山食べてお呉れ。」

と兩親は願ふ樣に言ふのでした。

そして自分達は、老の身の好める物を遠慮しても、嫁の澄江に食べさせ度いのが一杯でした。

「お父樣、お母樣、私ばかりが、こんな結構な物を頂く事は、どうしても勿體なくて出來ません。」

「その遠慮がいけないのだよ。

それはお前が食べるのじやなく、照代にお乳にして食べさせるのだよ。

それを思つて、家のため照代のためと思つて、食べてお呉れ。」

「おいしいまづいは、食べる間少しの間の事だよ。

どんなものでも、子供の體を作るために、必要だからこそ、お前に食べて貰ふのだよ。決して遠慮をしてお呉れでない。」

これを聞くと、澄江は廣い世間にも、これ程勿體ない慈悲深い舅姑があるだらうかと、感激の涙をこぼさないではゐられませんでした。

かうした祖父母や兩親の手で、懇ろに育てられる照代が、素直に蟲氣なく育つのは、當然の事でございます。

照代こそ日本一の仕合せな赤ん坊でございました。

栂檀の實

福德圓滿な家庭に生れ、清く誠からなる慈愛の哺みを受ける事に依つて純眞にその生命が伸びて行く可愛い、赤ん坊といふよりも、照代は一種違つた赤ん坊でございました。

それは日々大きくなるにつれて、自然に何處か他の子供と違つた嚴かな力が現はれて參りますので、祖父母や父母を吃驚させる樣な事も屢々ございました。

いつも澄江が神前に跪いて、拍手を打つて禮拜をし、お佛壇の前に行つて、お鈴を打つてお祈りをする時は照代を傍に坐らせておくのでした。

まだ誕生を迎へたばかりで、漸く座敷の中を、可愛い、足で、よち〳〵と歩く位の幼兒で、

物の道理も分らず、口の利ける譯もありません。

それなのに或日、知らぬ間に見えなくなつたので、祖父の國義が家中を搜して歩くと、照代は佛間に入つて、ちやんと神前に坐つて紅葉の樣な手を合せ、何か分らぬ事を言つて、何度も何度もお辭儀をすると、今度は佛壇の前へ行つて、お鈴を打ち、又何か唱へては手を合せて拜んでゐます。

その樣を見た國義は、

「お前はまあ何といふ可愛い子だらう。本當に人間の子ではない樣な事をする。」

と頬摺りをしながら、座敷へ抱いて來ると、

「この子は不思議な子だよ、こんな小さいのに、神樣の前でちやんとお辭儀をしたかと思ふと、今度は佛樣の前へ行つて、澄江の通りに、お鈴を打つて頻りに拜んでゐるのだよ。」

「まあ、見やう見眞似で、覺えたのでございますわね。」

「親のする事は皆、その通り子供の手本だから、氣をつけなくちやならないものだね。」

「こんなに小さいのに、もうお參りする事を覺えたんですね。」
「さうだよ。何でもすぐ子供はその通りに覺えるものなんだが、この子は特別らしい。」
と話し合つたのでした。
或時他家の人が、用事があつて來て、座敷に坐つてゐる中に、何を驚いたのか、
「まあお宅のお嬢ちやんは、お幾つですか。」
「昨年生れまして、やつと誕生が一月過ぎたゞけです。
どうしてゞございますか。」
「でもお嬢ちやんが、生きた仔猫を抱いてゐらつしやる樣子はどうです。いかにも可愛さうに、可愛いゝお手々で、頭や體を撫でゝゐらつしやるではありませんか。」
「えゝこの子はとても猫が好きで、始終あゝして、猫を抱いては喜んでゐます。」
「猫のお好きな事は、それとしましても、うち等の子供などは、犬を飼つても猫を飼つても、見てゐられない程虐めて、とても亂暴な事をしますので、痩せて終ひます。
四つにも五つにもなつても、物の道理が分らないで、無茶ばかりします。

それはうちの子供だけでなく、何處の子供でも同じ樣に、皆子供は無茶苦茶で困りますのに、お宅のお嬢ちやんは、こんなにお小さいのに、仔猫をちやんと可愛がつて抱いてゐらつしやるのですから、感心して終ひました。」
「本當にこの子は、猫でも犬でも雞でも、性から好きなのか、よく可愛がります。
玩具などをやりましても、決して粗末にせずに、大切に持つて遊んでゐますが、厭になると、ちやんと敎へておいた通り、箱へ藏つて、そこら邊りへ捨てゝおくなんて事は、決してありません。」
「はゝあ、不思議なお子さんですね。」
「そればかりじやございません。
母親や私達が何か用事で立つ時も、御用があつて一寸行つて來ますから、おとなしく待つてゐるんですよ、と言ひ聞かせますと、につこりとしてうなづいて、じつと待つてゐます。
それから物覺えのよい子で、朝でも私達や國彥に嫁の澄江が、兩手をついて、お早うございますと挨拶するのを覺えて終つて、ろくに口も利かれぬのにその通り挨拶するのですよ。」

「まあ、さうですか。
實際驚く程ですね。」
「これはまだ四日程前の事です。私が冗談に、母ちやんにお乳を頂く時はお辭儀をして頂くんですよ。と敎へたのです。
すると、その次から嫁が乳を呑ませやうとすると、いきなり吸ひ付かないで、母親の顏を見て、お辭儀をして、乳に吸ひついたので、嫁が吃驚して終ひました。全くこの子は變つて居ります。」
「まあ、そんなに賢いお子さんは、私見た事がありません。」
「それにまだ不思議な事は、字なんかまだ一度も敎へた事はありませんから、知る筈はありませんのに、繪なんか見付けると、一生懸命でぢつと見てゐるのです。
親の慾目かも知れませんが、習はぬ字でも、讀めるのじやないかと思ふ事がございます。」
「殊に依ると、昔からよく聞く神童といふのじやないでせうか。
神童ですと、習はない字でも讀むし、繪でも描くさうです。

そして誰からも習はない、敎はらない事でも、自然に分るさうです。」
「まさか神童なんていふ事はございますまいけれど、不思議だと思ふ事はよくございます。」
かくして次から次へと、祖父母や兩親近所の人達の、舌を卷かせる樣な非凡な智惠を現はし乍ら、照代は順調に大きくなつて、五つ頃になると、大人も及ばぬ樣な智力が出來て參りました。

慈心仁心

一度祖父母や父母が、話したり讀んだりして聞かせた事は、必ず覺えて終つて、決して忘れるといふ事はありません。
だから間違つた事を敎へては大變だと思ふ餘り、却つて祖父母や兩親の方が、自己の修養に力を盡さねばなりませんでした。

名望家の一人子の事故、親戚知己その他から、澤山誕生やお節句や七五三の祝ひなど、色々贈られて、目の覺める樣な着物、帶、玩具、飾り物など、數多く持つてゐます。

幼い時は蟲干しなどをしても、美しいと言つて手を叩いて喜ぶだけで、誰の物とも知らなかつた照代も、五つの夏の土用干の時、

「母ちやん、このお着物誰の？」

と尋ねました。

「これは皆、照代ちやんのよ。」

「これみんな私の？」

「さうよ。みんな貴女のですよ。」

「たんとあるのね。私のお着物。」

「さうですよ。貴女嬉しいでせう。」

照代はじつと見てゐましたが、

「母ちやん、清ちやんや春ちやんも、こんなお着物たんとあるの？」

澄江はゝつと胸を打たれましたが、何氣なく

「さあ、どうでせうね。　何故？」

と尋ねて見ました。

「だつて私ばかりこんなに澤山あつても、春ちやんや清ちやんがなければ可哀さうだわ。」

「まあ照ちやん、貴女そんな事思ふの？」

と言つたまゝ、澄江は心で祕かに恥じました。

近所隣に、盆正月の祝ひにさえ、新しい晴着を作つてやる事の出來ない貧しい人が多いのに、自分達はそれに平氣で、お金に不自由せぬまゝに、季節々々に合せて、着物も買つて着たり、比較的村には過ぎた食物を食べたり、誰に遠慮もなく、年々蟲干をして、近所の人に平氣で見せてゐた。

それが周圍の人の心に、どんなに反映するかといふ事さえ考へた事もなかつた。それが僅か五つやそこらの頑是ない子供から、今の言葉を聞くと、この子を通して、神の御啓示を聞いた樣に感じて、そこへ蹲まつたまゝ澄江は合掌して終ひました。

「母ちやん、どうしたの？」
「神様を拜んでゐるのですよ。」
「何故今頃拜むの。」
「有難いと思ふ事があるからですよ。」
「母ちやん、朝と晩でなくても、有難いと思つた時は、何時拜んでもいゝの？」
「さうですよ。有難いと思つた時は、いつでも拜むんですよ。
ねえ照ちやん、貴女は澤山おべゝがあるから、清ちやんと春ちやんに一枚づゝ上げませうね。」
「母ちやん、上げてもいゝの？　そしたら私達三人で、お揃ひできれいな着物を着て、お宮様へも學校へも遊びに行けるから嬉しいわ。」
「さうね。ではどれが清ちやんや春ちやんに似合ふか、貴女見て頂戴。」
「母ちやん、今着ていゝのは、どれとどれなの。
それを選り分けて頂戴、その中で私選ぶわ。
あゝ、それよりお正月に着るのと、二枚づゝ上げた方がいゝわ。

母ちやん、兩方出して見て頂戴。」
澄江は單衣三枚、綿の入つたのを三枚出してやりました。そして、
「これが今着るのよ。これがお正月に着るの。だから一枚づゝ分けて頂戴ね。」
照代は三枚づゝ竝べられたのを、ぢつと見凝めてゐましたが、
「これとこれを清ちやん、これとこれを春ちやんに上げませう。
殘つたのを私のにするわ。」
と選り出しました。
澄江はぢつと考へてゐましたが、兩親に無斷で計らう事も出來ませんので、
「おぢい様やおばあ様に見て頂いて來ませうね。」
と言ひ乍ら、兩親の部屋へ行つて、その着物を見せ、
「あの照代がこれとこれを春ちやんに、これとこれを清ちやんに上げ度いと申しますが、どうしましたらよろしうございませう。

蟲干致しましたのを見まして、自分ばかりあつても、清ちやんや春ちやんが持つてゐないので可愛さうだから、澤山あるのを一枚づゝお正月着るのと今着るのとを、分けて上げると申すのでございますが……。」

と相談しました。

「まあ照代が、そんな事を言つて、自分で着物を選り分けたのかい。」

「はい、照代がこんな美しい着物澤山、誰のかと申しますので、みんな貴女のだと申しますと、照代は目を丸くして、では清ちやんや春ちやんもあるかと申しますので、何と申してよろしいか分らないので、さあどうでせう。と申しますと、こんなにあるのだから、分けて上げやうと申すのでございます。そして自分で選つたのでございますが……。」

「まあさうかい。

負うた子に教へられて淺瀬を渉るといふ事があるが、本當にさうだ。

こんな派手な三つ身なんか藏つておいたつて、今に大きくなれば何にもならないし、蟲に食

はれるばかりだから、欲しくても買はれない人に上げたら、どんなに喜ばれる事か分りません。

では照代をつれて行つて、譯を言つて上げて來てお呉れ。」

「有りがたうございます。ではさうさせて頂きます。」

兩親の許しが出たので、澄江は喜んで、それを持つて、照代をつれていつも遊んで呉れる近所の清子と春子といふ二人の子供のうちを訪ねて、差出しました。

それを聞くと、親達も子供も大變喜んで、

「だつてこんな結構なお着物は、お嬢様がお召しになれば似合ひますけれど、うちの子供などに着せましても、不釣合でございますから……。」

「そんな事があるものですか。

どうか餘りそんな事を仰有ると、小さな子供達の純な魂を傷けますから、心持よく着せて上げて下さいませ。」

「左様でございませうか。

では折角お孃様が、そんなに仰有つて頂きますものを、遠慮致しましては、却つてすみませんから頂いておきます。

清子、みなさい。こんな立派なおべゝをお孃様が下さるつて仰有るのですよ。さあお禮を申しなさい。」

「照ちやんありがたう。」

「それ着て、春ちやんと三人で、お宮や學校へ遊びに行きませうね。」

照代も喜んで母と共に歸るのでした。

又時々照代のうちで、お萩やお餅やお酢お赤飯などが出來ると、照代は屹度箸を取る前に、

「清ちやんや、春ちやんのうちにもあるか知ら？

呼んで來て、一緒に食べ度いなあ。」

と言ふのでした。

祖父母や父母は氣付いて、

「さう〳〵、では清ちやんや春ちやんの所へも、分けて上げませう。」

と持つて行つてやると、初めて安心した樣に、喜んで食べるのでした。

國彥は

「小さな博愛主義者が出來て終つた。」

と言つて、うち中の人を笑はせるのでした。

けれども祖父の國義は首を傾げて、

「我が身を思ふ如く、人の身を思ふといふ事は、誠に結構な事で、神佛の心そのまゝで、尊ぶべき事だけれど、しかしこれが大きくなつて、養子を取る樣になると、うちの身代はみんな人に分けて施して終ふ樣な事にならぬとも限らぬ。」

「さうですわね、かうした魂を持つ子が生れて來るのも、うちのためにはよい事か惡い事か、まるで謎の樣な運命を掴んで來た子供の樣に思はれます。」

とこんな事を言つて、うち中の者が、心配する事さえありました。

それにはかまはず、照代は魂も體も豐かに伸びて、八つの年の春四月は村の小學校へ入學する事になりました。

聖少女

神童かと一般に噂されて、幼少の頃から人々を驚嘆させる樣な、奇蹟的の力を發揮してゐた照代が、兎も角小學校の一年生として入學したのでございます。

この村の學校では、一年生は校長先生自からが敎へられる事になつてゐますので、照代は入學の最初の日から、校長先生の敎へ子として、五十人餘りの男女學友と共に學ぶ事になりました。

いよ〳〵授業を始めて見ますと、他の子供は、二三優秀なのは別として、大方平凡な子供で年齡に應じた力しかありませんので、文字を讀ませても、却々思ふ樣に進まず書かせても、變な文字しか書けません。

算術なども、却々苦心して敎へられますが、却々覺えられません。

それでゐて惡戲は實に天眞爛漫で、手に合はないといふ有樣で、例年の事乍ら學校に馴れさせる迄の躾をするだけでも、却々ではありません。

さうした中に、照代は斷然異彩を放つてゐました。

別に大人びた子供といふのではありません。

矢張り心も態度も純眞な子供でありますけれども、天然に持つて生れた力といふものは、どうする事も出來ません。

文字を讀ませますと、一句の淀みもなく、涼しい聲で敎へられたまゝに讀みます。

文字を書かせれば、美しく活々として、勢があります。

島崎校長先生は驚嘆されて、職員室へ持つて行かれ、

「どうです皆さん、

今日初めて書かせた、八幡照代の字です。
しつかりしたものではありませんか。」
先生方も見て感心され、
「まあ、これが一年生の書いた字ですか。
私達傍へも寄れない位です。」
「驚きましたね。噂には聞いてゐましたが、こんな力を持つてゐやうとは思ひませんでした。」
「全くうまいですね。しかも大人の書いた様な巧みさでなく、子供らしい純眞さが溢れてゐるではありませんか。」
「それに算術を教へて見て驚きました。
數の觀念なんかも、とても發達してゐて、一年生並に取扱へる様なものではありません。
しかし二年や三年へ飛ばせる譯にも行かないし、全くどうしたらいゝかと思ひますよ。」
「左様でございますか。そりや何とかしなけりやなりませんね。」

「僕が思ふには、二年へ編入したつて、とても一緒に扱つて行かれやしないのです。」
「はゝあ、隨分進んでゐる様でございますね。
教へられないのに知つてゐるのでせうか。
それこそ本當に噂の通り神童なのかも知れません。」
「しかし、そんなに學齡迄に進むといふのは、不思議ですね。
一體どういふ譯でせう。うちで折角教へたのでせうか。
それとも環境からさうなつたのでせうか。」
「それは八幡さんでは、御主人夫婦も御隱居夫婦もとても物識りで、しつかりしてゐらつしやる上に、永らく待つてお出來になつた子ですから、おうちで一生懸命で教へられるゝめに、小さい乍らも一年二年の教科位の知識は頭に一杯入つて終つてゐるのではないでせうか。」
「それだとすると、三年へでも入れる事にするのですか。
でもそれも變なものですね。年が外の子と、同じなんですから。」

「それでは校長先生、
八幡は自分にそんなによく、何も彼も分つてゐるから、人を低能兒扱ひにして困るといふ樣な態度でもございますか。」
「いや、そんな事はちつともないのです。
むしろどんな事でも、とても眞劍で聞いて、一つ〳〵頷いて聞入つて、さも合點が入つたといふ樣な顏をするのです。
そして態度が非常に純眞で無邪氣ですから、一寸見ると矢張り當り前の子の樣に見えるのです。
が扨色々の事を尋ねて見たり、やらせて見たりすると、格段の差があるのです。」
「はゝあ、全く稀な子ですね。」
「校長先生でさえ、お取扱ひにお困りになる程ですから、餘程變つてゐるのでございますね。」
職員室では、色々照代の事につき、協議致しましたが、結局普通の子と同じ樣に、一年生と

して取扱ふ事になりました。

恩師の心

或日校長先生は、照代の事につき八幡家を訪れられました。
澄江は喜び迎へて、茶菓を出してもてなし、
「校長先生、よくお越し下さいました。
日頃照代が一方なりませぬお世話樣になりまして有りがたうございます。學校の方へも樣子を見せて頂きに、時々上らなければと存じ乍ら、つい多忙に取紛れて、失禮に打過ぎまして、申譯もございません。
定めし我儘ばかり申しまして、先生をお困らせ致して居ります事でございませう。」
「いや、それどころではございません。

私共年ばかり取りましても、一向行屆ませんで……。
實は今日は一寸御願ひ申し度い事がございまして、上りました譯でございますが……。」
「それは〳〵ようこそお出で下さいました。
あの何か、子供の事でございませうか。」
「はあ、實はこんな事を申上げましては、どうかと思ひますけれども、照代さんは餘り學科の方が、分り過ぎて居られまして、他の子供と力が平均してゐませんので、取扱ひ上少し困つて居りますのでございます。」
「まあ、照代が外の子供衆と違つてゐると仰有るのでございますか。」
「はい、外の子供達は小さい時から、成るがまゝに委せておいたのが多くて、元氣よく遊ぶ以外には、學科など敎へるといふ樣な親は少いのでございますが、お宅樣は特別な御家庭で、皆樣が揃つて御聰明でございますから、その御血統を受けて居られます。
それと、皆樣がお敎へになりました事が、いつとなく照代さんの力となつて、養はれてゐる

のだと存じます。」
「あの宅では父も母も主人も、子供は飽迄子供らしい子供として、素直に育て度いと申しまして、決して文字や數など敎へてはいけないと、始終戒められて居りますので、うち中決して文字や數など敎へました事はございません。それこそ一度も文字など讀ませたり、書かせたり致しました事はございません。
父や母も決して左樣な事は致されませんが、どうしたものでございませう。」
島崎校長は吃驚して、
「左樣ですか、お宅では敎へてお出でにならないのでございますか。」
「はあ、うちではちつとも敎へました事はないのでございます。
それでは照代は、どの程度迄分つてゐる樣に、御覽頂きますでございませうか。」
「それが一寸程度が分らないのです。
文字でも一度敎へますと、先生でさえ恥かしい樣な字を書きます。

本を讀ませたり、算術を敎へたり致して見ましても、どれだけでも知つてゐる樣でございます。

まあ私共の見た所では、二年三年上の子供と一緒に學ばせても、結構進んで行けるのじやないかと思ひます。」

「まあ、そんな風に見えますでせうか。

それだとどう致しましたらよろしうございますでせうね。

私共は矢張り一年生から順序よく敎へて頂いて、唯普通の女性としての力をつけて頂けば、充分だと存じますから、子供の時から、特別に扱つて頂いたりなどして頂かない方がよいと存じます。

子供の頃から餘り智惠があり過ぎる子は、早く壽命がなくなりますと申しますから……。

それにさうした子供は大人になると、却つて普通より愚鈍な人になる事が多いと伺つて居りますから、何だか心配でございます。

よく昔から言はれてゐます通り、十才で神童、十五で才子、二十歲過ぎたら、唯の人といふ諺がございますから、私先生から、今の樣なお言葉を承りますと、あの子の前途が氣遣はれてなりません。」

「いや、これは飛んだ御心配をかけまして申譯もございませんが、實は餘りよくお出來になり過ぎますので、何とかいゝ方法はないかと、職員とも協議致しました上で、一寸御相談に上つたのでございました。」

「色々御心遣ひ頂きまして恐れ入りました。

私共では出來るだけ、普通の子供衆と同じ樣にお導きを頂き度いと存じますから、どうぞよろしくお願ひ致します。」

「いや、それを伺つて、私も安心致しました。

職員間でも種々意見は出ましたが、結局外の子供達と一緒に、年相當に一年生として扱つた方がよいといふ事になりましたので、それでは一度御家庭の御意見を伺つて來やうといふので

上りました譯ですが、それを伺ひまして、私の方針も定りました。
どうもお忙しい所へ上りまして、お邪魔致しました。
では御兩親様や御主人へよろしく。」
校長先生は早々にして歸られました。

母の心配

門迄送り出しておいて、澄江はじつと思案に暮れましたが、自分一人の力では判斷もつかないので、軈て兩親や夫にも告げて、うちでの照代の取計ひにつき、相談致しました。
すると國義は笑つて、
「子供が物覺えが惡いから、うちで少し注意して勉强させよといふ事は、よく聞く事だが、出來過ぎて困るから、餘り進まぬ様に、注意して欲しいと賴まれる様な事は、滅多に聞かぬ。

おかしい話じやないか。はゝはゝゝゝ。」
信江は微笑み乍ら、
「でもおぢいさん、何でも度を越えるといふ事は、困るに違ひありません。照代には、文字なんか、うちでは誰も教へないのに、どうしたものでございませうね。」
「矢張り天性といふのだらうなあ。」
「かういふ事は喜ぶべき事か、憂ふべき事か、私にも一寸判斷がつかぬわい。」
と國義は腕を組むのでした。
これ迄國彦はぢつと考へてゐましたが、何か深く感ずる所があつたのか、
「では私から一度話して見ますから、照代が歸つたら、お父さんもお母さんも澄江も來ないで、あれだけ私の部屋へ來させて貰はう。」
こんな話を、うちの人達がしてゐるとも知らず、照代は元氣よく歸つて來ました。
一度教へたら忘れない子だけに、可愛らしい手を突いて、

「只今歸りました。」
その可愛らしい姿を見ると、抱き上げて頰摺りし度い程の思ひを押へて、祖父母や父母は、
「お歸りなさい。」
「早かつたね。」
「今日もよく勉强出來たかい。」
「はいよく勉强出來ましたわ。」
「さう、それはよかつたね。では少しうちで休んでから、又遊びに行くんですよ。」
「はい。」澄江は微笑み乍ら
「あの照ちやん、お父樣が御用がお有りだそうだから、お部屋へ行つてゐらつしやい。」
「はい。今行くの？」
「あゝ、すぐにお出で。」
國彥は立つて、部屋へ行きました。照代もその後から元氣よくついて行きました。

父の教訓

國彥は自分の机の前に坐ると、言葉優しく、
「照ちやんもそこへお坐り。」
「はい。」
照代は素直にはつきり答へて、父の向ひ側へ坐りました。
そして美しい瞳で父の顏をじつと見凝めました。
その優しく賢しげな我子の姿を見ると、國彥は燃える樣な、我子愛しさの思ひが胸に迫つて來るのでした。
「照ちやん、お前學校へ行つて、毎日どんな事を習ひます？」
「初めはみんなとお遊戲したり、色々な物を見せて、先生がお話して下さいましたけれど、こ

の間から本を讀む事や、字を書く事や、數へる事などを敎へて頂きますわ。」
「みんな校長先生が敎へて下さるのだね。」
「は、。校長先生に何も彼も敎へて頂くの。」
「校長先生はいゝ方だね。」
「えゝ、みんなお手を取つて、字を書かして下さるわ。」
「さう。照ちやんも先生に手を取つて書かせて頂いたの？」
照代は頭を振つて、
「私は手を取つて書かせては頂かないわ。」
「何故なの？」
「何故か分りませんわ。」
「校長先生の敎へて下さる事は、よく分りますか。」
「はい、よく分ります。」

「照ちやんは、學校へ行かぬ中に、本を讀んだり、字を書いたり、お勘定をしたりする事を、おぢいさんやおばあさんや、お母さんに敎へて頂いた事はなかつただらう。」
「はい、ありませんわ。」
「それでは學校へ上つて、先生に敎へて頂いても、よく覺えられないで困る樣な事はないの？」
「先生の仰有る事をよく聞いてゐると、はつきり分るから、みんな覺えられるわ。」
「お前學校で、まだ敎へて貰はない所を、勝手に讀んだり、習はない字を書いたりしやしないか？」
「先生が讀めと仰有る時だけ讀みます。」
「それは敎へて頂いて讀むのですか。」
「あの、敎へて頂いて讀む時も、敎へて頂かないで讀む時もあるわ。」
「敎へて頂いて讀むのはよいが、敎へて頂かない字がどうして讀めるの？」
父にさう言はれると、照代は默つて、可愛らしい眼をぱち〳〵させて、父の顏を見てゐます。

「字を書く時もさうなの？」
「はい。」
「じや教へて頂かない字も書くのだね。」
「先生がこの字を書いて見よと仰有る時は、本を見て書くわ。」
「手を取つて頂かないで、獨りで書くのだね。」
「えゝ、一人で書くの。」
「それでは數は、幾つまで數へる事を習ひました？」
「五十迄。」
「みんなの人が數へられますか。」
「はい、でも一人か二人、まだ數へられない子があるわ。」
「お前はみんな數へる事が出來るね。」
「はい。」

「では數へて御覽。」
純眞な照代は、一つ二つと、はつきりした聲で數へ初めました。
そして五十迄來た時、國彦はにつこりして、
「はいよろしい。上手に數へたね。
それからまだ澤山數があるが、知つてるの？」
「はい。」
「じや數へて御覽、五十一から。」
「五十一、五十二、五十三、」
照代は又も純眞に數へ初めました。
國彦が百になつても、二百になつても、止めずに、ずつと聞いてゐると、少しの淀みもなく
ちつとも違はないで、數へ續けます。
國彦は呆れて、

「照ちやん、もういゝ、止めてよろしい。
お前そんなに澤山の數を數へる事を、誰に習つた？
おぢいさんかい、おばあさんかお母さんか？」
「誰にも私敎へて貰はないわ。」
「ではどうして習つたのだ。」
照代は答へられないと見えて、默つて父の顏を見てゐます。
國彦はどう處置していゝのか、分らなくなつてじつと目を瞑つて考へてゐましたが癪て慈悲に滿ちた聲で言ひました。
「照ちやんお前、學校へ行つて、まだ先生から敎へて貰はない本を讀んだり、字を書いたり、數を數へたりすると、外の子と仲よく遊べなくなつて、難しい字を書く、年の上の子と一緒に勉强したり遊んだりしなければならなくなると、先生が仰有るが、お前さうしたらどうする？大きなお友達なんかと一緒に勉强したり遊んだりするのは厭だらう。」

「私春ちやんや清ちやんや、外のお友達と仲よく勉强しますわ。
さうでなくちやいや。」
「さうだらう。
それならよくお父さんの言ふ事を聞くんですよ。」
「はい。」
「それでは、明日から學校へ行つたら、先生の敎へて下さる事は、みんなと同じ樣に、眞面目で讀んだり書いたりするのはよいが、校長先生が讀めと仰有つても、まだみんなが習はない所を讀んだり、敎へて頂かない數を幾つ迄も數へたりしてはいけません。
そんな事をしないで、敎へて頂いた事だけ、決して忘れない樣に、しつかり覺えるのですよ。
それが出來ますか。」
「はい。出來るわ。屹度。」
「それが出來たら、お前は先生方からも可愛がられ、お友達からも仲良くして貰つて、仕合せ

に勉強が出來ますからね。」
「はい。」
「お父さんのお話はこれだけです。
あちらへ行つてお八つを頂いて、遊んでお出で。」
「はい。」
と答へて照代が立つて行きかけると、國彦は何を思つたのか、
「照ちやん、一寸お待ち。」
照子は、
「お父さん、何？」
と引返して來ました。

神童の面影

「照ちやん、これ讀める？」
と國彦が出して見せたのは、難しい漢字ばかりの般若心經の本でした。
照代は目を輝かして、
「お父樣、お讀みになれる？」
「お父さんは讀めるよ。」
「じやお父樣、讀んで御覽なさい。
お父樣が讀んでからなら、私も讀むわ。」
國彦は不思議な事を言ふと思ひ乍ら、聲を張上げ、音律正しく、その一節を讀み終りました。
照代はじつと本を見凝め耳を傾けてゐました。
「さあ讀みましたよ。
照ちやん讀める？」
「えゝ、讀みますわ。」

照代は可愛いゝ聲で、ちつと父の讀んだ通り、朗々と讀み終りました。
いつの間にか入つて來た澄江は呆れて、
「貴方、照代は……。」
「……。」
二人は顔見合せたまゝ、喜ぶべきか憂ふべきか分らず、沈默して終ひました。
照代は悲しい樣な不安な樣な顔をして、兩親の顔を代る〳〵眺めてゐます。
軈て國彥は和やかに、
「照ちやん、よく讀めたね。」
「でもお父樣が讀んで下すつたから、私覺えたんですもの。」
「貴女は賢いね。物覺えがよくて母さんも嬉しいわ。」
「照ちやん。さつきお父さんが言つた事、よく分つたね。
これから後も、今の樣に先生やお父樣などに、敎へて頂いてからでないと、御本を讀んだり

書いたりしちやいけないのだよ。」
「はい。」
「ではさあ、あちらへ行つて、お母さんにお八つを頂いて、遊びに行つてらつしやい。」
澄江は照代をつれて、茶の間へ行きました。

眞珠の光

世の人の子の親は、皆愛しい我子の行末を思ふまゝに、我身の無力は省みもせず、我子の心が清く明るく、體も健やかで、知能才知も人並より優れた、申分のない人格者に哺み度いために、我を忘れて我子のためには盡します。
その尊い有難い親心が分らずに、勉强もせず、遊び怠けて、學業成績惡く、體は弱くて、父母に苦勞ばかりかける子の、餘りにも多い世の中に、祖父母、父母よりも、生れつき非凡な力

を自然に持ち、習はない事を知つて讀み書き出來る子の、その有り餘る力を押へて、平凡な子におほし立てやうとする親の苦心も、世の常の事でないために、並大抵ではありませんでした。毎日伸び樣とする力を、發揮しやうとする魂の力を、何とかして押へて行かうとする戰ひを繰返す樣なものでした。

兩親祖父母の苦しみと同じ程度に、受持つ先生も苦しみました。

唯純眞なのは、照代だけです。

學校から歸つても、復習もせず、豫習もせず、のんびりとして、遊ぶのです。實に天眞爛漫として、天使そのまゝです。

それでゐて人には極親切で、分らぬ事は懇ろに敎へてやります。

村の人達は、みんな

「八幡のお孃樣は、御先祖樣からの素姓が違ふからお賢いのです。」

「うちの子供達は、親が愚鈍だから、子も愚かだ。」

と言つて、當然の事として認めて居りました。

そして照代の聰明を、取分け不思議に思ふ人はありませんでした。

伸び行く心力

だが照代の性格は、年月と共に伸び、魂の力は、自ら發揮されて參りました。

言ふ事する事の悉くが、凡人とは變つた事ばかり申します。

例へて申しますと、空を眺めてゐても、普通の者なら、天氣の豫測は出來ませんので、

「降るでせうか。降らないでせうか。」

「さあ、どうでせうね。天氣になればよいが、降ると困りますね。」

「しかし百姓はもう一日思ひ切り降つて貰はぬと、作付が出來ないので困ります。」

などゝ言ひ合つてゐます。大人でも先の天氣は分りません。

それを聞いてゐて、照代は
「明後日のお午から、風が吹いて雨が降りますよ。」
「えゝ？明後日の午後から雨が降りますつて？
どうしてそんな事が分りますか。」
「だつて分るんですもの。
明後日の午後、とてもひどい風が吹くから、お茄子なんか、倒れない様にしておかなくちや
駄目よ。
そして海へなんか出てはいけないわ。屹度暴風雨になるから。」
「まあ大變な事を仰有いますね。本當でせうか。」
「本當ですよ。氣をつけて頂戴な。」
果して當日になると、お晝頃から天氣の工合が變つて、暴風雨になり、沖へ出て、難船した
者がありました。

この事があつてから、村の人々は、照代を不思議な豫言者として、噂をする様になりました。
その外照代は、人の心を讀み取る事が、奇妙に上手でした。
或日濱の人が、國彦に頼み度い事があると言つて、訪れました。
折惡しく外出して留守でしたので、座敷へ通して待たせておきました。今年十四になつた照
代は、母に言付けられて、お茶を運びました。
「粗茶でございますが、お上り下さいませ。」
と丁寧に侑めましたが、お勝手へ歸ると、
「お母様、あの方とてもお氣の毒な方ね。」
澄江は審しく思つて、
「どうしてそんな事を言ふの？」
「だつて持舟を流されて、お仕事が出來なくなつて、生活が立たないからお父様にお願ひして
お金を借りやうとして、ゐらつしやつたのですもの。」

「まあ、あの人が？　本當ですか。
そんな事を貴女に、あの方お話しになつたの？」
「いゝえ、口では仰有いませんけれど、心で思つて見えるのが分つたんですもの。」
「まあ貴女は、人が心で思ふ事が分るのですか。」
「それ位の事は、私にだつて分りますわ。」
「まあ、貴女は不思議な人ですね。
本當に人が心で思ふ事が分るのですか。」
「だつてお母様、誰でも分るのが本當でせう。」
「いゝえ、普通の人は、耳で聞かなけりや分りません。
心で思ふ事が聞ける人なんて、萬人に一人もないんですよ。
ではお母様が今考へてゐる事が、貴女に分りますか。」
「分りますわ。

お父様が早く歸つてゐらつしやればいゝのに、長くお待たせしてはお氣の毒だ。あの人難しい顔をしてゐらつしやるけれど、どんな御用事か知ら？　と思つてゐらしたでせう。
でも、今は私の事を、人の心をそのまゝ讀取るなんて、普通の人より違つた性質があつて、いゝのか知ら？
とお母様、心配してゐらつしやいますわ。
ねえ、當つたでせう。」
「まあこの人は？　一體どうしたといふのでせう。
照ちやん、お願ひだから、これからはそんな事言はないでね。
そんな事を言ふと、世間の人が貴女の事を變つた子だ、豫言者だと、變な噂を立てると、貴女のためによくないから。
人並な事を言つて、人並の事だけして、人のしない事言はない事は、しない様、言はない様にしてね。

お母さんのお願ひだから……。」

かうなると照代には、世の中の事が、何が何だか分りませんでした。

照代にして見れば、一本の掛物を見てゐると、それは何年何月に、どんな人が、どうした心持で書いたか、どういふ經歷でこゝにあるかといふ事迄分ります。

佛像書畫骨董品でも、手に觸れ、目に見ると、その品の故事來歷曰く因緣がはつきり分つて間違ひなく言ひ當てるのでした。それが當然だと照代自身は考へてゐます。

それで人もさうだと信じ切つてゐますために、少しも不思議に感じません。刀劍類でも何でも、折紙だ鑑定料だと鑑定のために誰もが澤山のお金を費すのが不思議でなりません。

うちに寶藏してある色々の、先祖傳來の寶物でも、照代が見て、

「これはこうだ。」

と申しますと、祖父母や父母は驚いて、

「そんな事を言つてはいけません。

素人などで分るものではありませんから。」

と照代の明を蔽ふ樣に力を盡すのも、照代には不可解でした。

家庭ばかりではありません。

學校でも同じ樣に、何を見ても聞いても、忽ち魂の力が働いて、先生方の想像も出來ない樣な事でも、はつきり知つてゐます。

どんな難しい事でも、照代に聞けば造作なく分るのでした。

世にも重寶な天性として、先生方はその度毎に舌を卷かれました。

「しかしあの子が大きくなつたら、一體どうなるでせう。

一人娘だから、養子を迎へるでせうね。」

「勿論養子を迎へなければならないでせう。

しかしあんな全知全能に近い力を持つた人を妻として、見事夫としての權力で支配して行ける樣な人が、この世にあるでせうか。」

「さうですね。勿論この畏隈にはありませんけれど、大都會に行つたら、一人や二人位變り者があるかも知れませんが……。」

「しかし八幡さんのお宅にも、よく〳〵變つた娘が出來たものですね。

うつかりすると、八幡さんのお宅も、こゝらであの子の爲に、お終ひになる樣な事がないとも限りませんね。」

「それはどういふ譯でせう。」

「だつて考へても御覽なさい。

あの變つた性格に加へて、世にも珍らしい博愛主義者ですもの、財産が自分の手に移れば、誰彼の區別なく世の中から惠まれない、哀れな人達に財産を分けてやつて終ふでせう。」

「或はそんな事になるかも知れません。

私もそれを始終思つてゐます。御兩親もその事には氣がつかれて、人知れず御心配してゐられる樣です。

この頃おぢいさんやおばあさんも、よく人に言つて居られます。

變つた孫が出來て、うちの身代もあの子の代で片付くかも知れません。百何代と開闢以來續いた八幡家だけれど、さうなる事も天命なら仕方がありませんがと、心配さうに話して居られました。」

「それは全くさうでせう。

あれ位出來過ぎた子を持つと心配です。

身代を減らさずに、相續させるためなら、少し不肖な子で、どちらかといふと慾心の勝つた强情な人間に限ります。」

こんな噂も學校だけでなく、あちらこちらの集りでも、よく人の口の端に出て、八幡家の家運に末が來たと、豫言する樣に語り合ふ者もある樣になりました。

それを聞くともなしに聞くと、國彥や澄江は、祖先父母に對して、申譯のない樣な感じがして、胸の痛みを感じ、心祕かに神佛に向つて、

「どうか照代が、普通の魂の持主となつて、八幡家をしつかり守りまして、家門を子孫に傳へて呉れます樣に御守護下さいませ。」

と深く祈るのでした。

照代は小學校も終つて、町の女學校へ入學致しましたが、何處へ行つても、天稟の才學を押へる事は、如何なる教育者の力も出來ません。

けれどもよく兩親から訓戒され、世の中の事や、人の魂の生活や、知能常識の働き等をよく知つて參りました照代は、自ら世の中の大局を見通して、身も心も慎んで、平凡な自己を裝うて、何事もなく、四ヶ年の課程を卒へました。

卒業して我が家へ歸りますと、十八といふ妙齡を迎へた照代は、魂にははち切れる樣な神秘的な力が湛えられ、それが體の全面を通して發揮されて、自ら慎しまうとしても、周圍から抑制しやうとしても、押へる事は出來ません。

凡そ世の中に外國文字日本文字で綴られたものでも、照代の眼に觸れたものは、一度で讀み

拔かれて終ふのでした。

十八の照代は、今は人の世で學ぶべき何物もないと、自ら深く信ずる所迄力が及んで居りました。

浮世の夢

照代は世の人から、羨望の的となる程、惠まれた家庭に生れ、幼い時から、うち中の人の掌中の珠の樣に重寶がられて育てられ、村人からも尊敬せられ、學校でも常に先生から、深く信じられ愛せられ、朋友間でも敬愛されて、自己が人間として生きて行く生活の中に、唯の一度も難關といふものに出逢つた事もありませんでした。

それこそ伸々とした、天眞爛漫な生命でありました。

その上照代の魂の生活は、この世の如何なるものに觸れても、分らぬといふ事はない程、靈

能力が働いてゐます。

初めの間は總ての人も、自分と同じ様に靈能力が備つて、何でも分るものと信じ切つて、少しも不思議に思はないのみか、寧ろ當然と思つてゐたのに、段々世の中の事が分つて來ると、祖父母兩親初め、世の中の總ての人は、目口耳鼻手足等の力で、實際見た事、聞いた事、觸つて見た事等總て一度體驗した事でないと、自身の智識として働かぬといふ事が分りました。

そして現在の目に見える物以外の事は、後も先も皆目分らないといふ事が分つた時、吃驚致しました。

そして自分が世の人より別な靈能力を持つてゐるといふ事が次第々々にはつきりして參りましたので、祖父母兩親の心持もよく分りましたために、自分は出來る限り、普通の人並である様に、身も言葉も慎んで、靈能力を餘り發揮しない様に心掛けてゐました。

しかし乍ら、この偉大な靈能力者が、目の先に見える事以外に、何も分らないで、喜怒哀樂様々な生活を繰返してゐる人々で、組織されてゐる世の中の姿を見る時實に不思議でたまりま

せんでした。

その一例を申しますと、八幡家の人達は別として、一歩家の外へ出ますと、我が村でも、お互に親子兄弟夫婦の間柄で、自我心が強く戰つて、始終家の中が揉めてゐる家が澤山あります。

時々はお互に口汚く罵り合つたり、時々は毆打して傷けたり、大切な器を投げつけて毀したり、言つてならない事を言つて爭ひ合つて、後で後悔してゐる様な人々が澤山あります。

學校の中でも、非常に學科の優れてよく出來る子と、先生が熱心に教へても却々覺えられない子との、力の差別が非常に大きい事、又それでゐて自我心は誰も皆强くて、自身の思ふ様にならぬ時は、己れの言ふ事なす事、それが良い悪いに拘らず、すぐに、相手を怨んだり罵つたり、又弱い者は自分で悲んで、氣落して悄氣たり陰で色々な事を言つたり行つたり致します。

これは幼い子供にも、成人した大人にも共通して居ります、日常生活の有様です。

これを見ます時、照代は一人、よく〳〵世の中の姿といふものを深刻に見凝めました。

世の中は人間の力でなく、自然の力に依つて、次々に生れて來る者は、大方男性と女性と相半ばして生れて來ます。

これが成人すると、様々な業を好む個性が備つて來て夫々職に就き、身分に應じて結婚し、その生業のために、樂しくいそしむ者もあり、又時には我が生業を好まず、始終不滿不平を抱いて、愚痴をこぼし、職業を變へたり、幾度も離婚したり再婚したりする人々もあります。

第一の照代の悲しみは、人間が餘りに魂に僞つた生活をして、身に間違つた行が多くて絶えず心と身を患つて苦惱し、呻吟してゐる有様を始終目の邊りに見る事でした。

人は他の動物と異つて、驚く程智惠があり、才能があり、その力で美しい家を建て、様々の形の華美な着物を、自ら工夫して身に纏ひ、自然に惠れた、穀物野菜果物その他の飲物食物も、人間獨特の力を加へ、色も形も香も麗はしくして食べ乍ら、絶えず身を患つて苦しみ、周圍の人をも苦しめ、この世の中を殘酷なものとして、呪つてゐる様な人が餘りにも多いのです。

そして眞實ありもせぬ事を誠の様に僞つて、人を欺いたり、人の物を奪つたり、甚しいの

は人の生命迄奪つて、財寶を取つて終ふ様な、大きな罪科を犯す人が、體は健やかで、その身患はずして、世の人の幸福を、次々に害ふために、澤山な人が生きてゐる事でございます。

動物の世界を見ると、その體の大小、形の美醜などの區別は色々でございましても、生活は萬古不變の眞理の力に依つて、生存して居ります。

動物は自ら食べる物の種も蒔かず、耕さずして自然に與へられ、暑さ寒さを凌ぐ着物も住居も自ら求めずして、自然に生きて行ける様に惠まれて居ります。

ために不自然といふものは、動物の世界に見る事はありません。

故に動物は自然に生かされ、自然に命を終つて行くのが當然になつて居ります。

人間の力で動物の自然生活を破壞したり、生命を奪つたりする時は、變則的現象を生じますが動物の生命を、自然のまゝに生かす時は、清くすが〳〵しく幸福に生きられるものである事を知りました。

それだのに大きな智惠と力を持つて生れた人間は、その力で總ての動物の生活を脅かし、幸

福を破壞し、且その生命を奪ふばかりか、人間自身の生活をもお互に自我といふ怖ろしい慾心で脅し、お互に魂にも體にも傷をつけ合つて苦しみ合つてゐるといふ事を、はつきり知つた時、照代の魂は驚愕して飛上りました。

あゝ世の中は、幾千年幾萬年とも知れない前から、同じ輝かしい太陽が、晝の地界を照してゐる。

又夜は皎々とした月が、幾億とも知れぬ星が、燦然として光を、地界に送つて輝いてゐる。

大地は常に、不動の力で、火水空氣の力と合して、總ての命を地上に生み育てゝゐます。

唯無量に清くして不變の、水空氣光の、宏大無邊なる力の中に、萬物の靈長として、大きな力を受けて、地上に生み出された人間の驚異的生命の、姿を見ると共に、又一面驚くべき、人間の變則生活に依つて、自ら不幸不自然な苦惱世界を求め、その力が伸びては、動物植物の自然生活をも破壞する事を知つた時、地上の由々しき大問題を發見した樣に、照代は驚いたのであります。

樂しき旅路

照代が町の女學校を、優秀な成績で卒業して、實家へ歸る時、兩親は揃つて學校迄迎へに參りました。

そして卒業式にも參列し、懇ろに學校の諸先生に謝意を述べて辭しました。

又親しい友達や、お世話になつた家をも訪れて夫々挨拶を述べてから、

「よい時だから。」

といふので、三人打連れて、關東關西の名所舊跡を見物して歸る事になりました。そして先づ第一に京都に行つて御所を初め、歷史に名高い名所舊跡、神社佛閣を巡り、桃山御陵を拜し、伏見稻荷にも詣で、神都に向ひました。

そして照代の望むがまゝに、五十鈴川の水で齊戒して、伊勢大廟に詣でました。內宮外宮そ

の他の神社に參拜して、二見ヶ浦に日の出を拜した後一路、帝都に向ひました。
東京に入ると、先づ第一に宮城を拜し、明治神宮と靖國神社に參拜して、それから次々の名所見物を致しまして、遠く松島迄足を伸し、日光も見物しました。
世にも優れたみめかたちに生れたのみか、萬人にも優れた聰明な魂を持つ照代を、我が生みの子として慈しみ乍ら、悉なく學業を卒へた喜びを祝ふために、父母相携へて、祖國の歴史の跡を探るといふ事は、國彦や澄江に取つても又となき幸福に、胸は滿たされて居りました。
かうして親子が、次々に名所舊蹟を探つて、日光から東京へ歸る汽車に乗込んで、一時間もたゝぬ時の出來事でした。
照代達の乗つた車は、可なり空いてゐました。
照代はのんびりと窓際に腰かけて、遷り行く春の野邊の風光を眺めてゐました。
或驛で停車すると顔色は人並優れてゐるが血色の惡い、しかも泣き疲れた樣な悄然とした二十歳位の娘が、年の頃六十位でどことなく面窶れのした浮世の苦勞に戰ひ疲れた樣な老人と入

つて來ました。
その後から、體はでつぷり肥えて、顔は膏切つて艶々してゐますが、何となく目付の鋭い、大兵の男が大きな鞄を提げて入つて來ました。
胸には時計の金鎖りが下つてきら〳〵光つてゐます。
指にも部厚な金の指輪を二つもはめてゐます。
何か普通でない世渡りをしてゐるらしい人といふ事は、一見して分りました。
老人と娘は照代と向ひ側の席に就きましたが、後から入つて來た男は、二人に向つて、
「私はこちらが空いてゐますから、こちらへ掛けますよ。」
と言ひました。老人は非常に恐縮して、
「はあ、どうぞ。」
と答へました。娘は無表情で、やゝうつむいたまゝ、何かじつと考へてゐました。
時々大粒な涙をはら〳〵こぼしては、薄汚れしたハンカチで押へてゐました。

その様子を老人は、痛はしさうに眺めてゐます。
照代は外の景色から目を離すと、じつとこの親子と連れの男との様子に目をつけてゐました。

哀憐の涙

その中余り娘が涙をこぼすので、父親は耐り兼ねたものか、
「お前も決心して承知して呉れた事だから、かういふ親を持つたのが不運と諦めて、泣かずに行つてお呉れ。
その代りうちでも言つた通り、これからうちではみんな一生懸命で働いて、屹度お金を拵らへて、三年たゝぬ間に、親許身受をして迎へる事にするから。
なあ、いゝか、お縫。」
娘は父にさう言はれると、

「お父さん、心配しなくてもいゝよ。
私もうすつかり覺悟してゐるのだから。
だけど承知はしてゐ乍ら、諦め切れないのが人情です。泣けるだけ泣かせて下さい。私の體中の涙が出て終へば、屹度笑へる様になります。」
「お前がそんな事を言ふと、私は生きてゐる氣もせぬ程悲しくなるのだ。」
「心配しなくてもいゝの、安心してゐらつしやいお父さん。
私さえ覺悟して身を捨てれば、お父さんも五人の子供も樂に暮せるのだから、私は喜んで身を捨てるのです。」
「おぬい。お前身を捨てる〳〵といふけれど、お前死んで終ふ譯じやない。無事でゐれば又逢へるのだ。
私は今言ふ通り、これから身を粉に碎いて、屹度五百圓の金を拵へて、親許身受に行くから……。」

「お父さん、そんな話はもう止めて下さい。
體を賣物にする樣な、怖ろしい世界へ身を沈める事は、死ぬより幾倍か苦しい慘めな事であるといふ事を、お父さんは知らないからです。」
「それは私だつて知つてゐるよ、知つてゐるからこそ、胸元が苦しいのだが、今の所うちの事を同情して、面倒見て呉れる親戚などは一人もないし、兄はお前の知つてゐる通り極道者で、三年前に家を出たきり行方が分らないし婆さんに死なれて、五人もの子供を抱えた私としては、お前に賴るより外仕方がない。
お前にだつて小さい時から、親らしい事もせず、慘めな生活をさせ、十四の年から稼ぎに出して、滿六年も親のため、弟妹のために、自分では半襟一掛も欲しいと思つても買はずに、うちを助けて呉れたのに、その恩に報ひもせずに、幾ら親兄弟が生きるか死ぬかの場合だとて、お前に苦界に沈んで呉れなどゝ賴むなんて事は、親の甲斐がない。
かうした親の子に生れたのが、お前の不仕合せだ。

どうぞ堪忍してお呉れ。私はお前にすまぬと思つて、心じや手を合せてお詫びしてゐるのじや。」
父親はとう〳〵聲を立てゝ泣き出して終ひました。
この親子の實に不思議な、さうして慘めな有樣に驚いて、照代は息もつがずに、じつと見入つて居りました。
この時後向に坐つてゐた連れの男が、つと立つて來て、見るも物凄い樣な顏をして言ふのでした。
「見つともないぢやないか。
こんな汽車の中で愚痴などいふ事は、止めたらどうだ。
うちを出る時、決心して出た以上、今になつてから、愚痴を言つて、人前で泣くなんて見つともない。止めなさい。」
「旦那樣すみません。

これが餘り泣くものですから、つい私迄愚痴を申しました。」

「困るなあ、そんな風じや。

お縫さんもさうだ。今こそ何も分らないから、奈落の底へでも沈められる樣に思ふけれど、實際行つて見りや、想像したとは違つて、面白い世界なんだ、毎日うまい物を食べ、美しい着物を着て、嘘でも出鱈目でもいいから、客を喜ばせて、金を澤山使はせさえすれば、自分も早く自由な身になれるのだ。

それは腕前一つです。一年位でも五百や千の金は稼ぎ上げて終つて、涼しい顏をして、お父さんの所へ歸れるのです。

又運がよければ、どんな素晴らしい富豪や地位のある人に引取られて、思ひがけぬ出世をせぬとも限らぬ。

身を捨てゝ、本當の幸福を拾つた人は、數限りなくあるのです。

だからそんなに怖ろしがつて、泣いたりしなくてもいゝんだ。

怖いも辛いも、初めの中僅かの間です。」

と說き聞かせるのでした。

娘は何と言はれても返事もせず、靜物の樣に、ハンカチを咥へたまゝ、俯向いてゐます。

父親は頻りに頭を下けて、

「有りがたうございます。御心配かけてすみません。

よく言ひ聞かせます。」

と恐縮して答へるのでした。

件の男は安心して又元の席にかへつたと思ふと、洗面でもするのか、こつ〳〵と後の車の方へ歩いて行きました。

それを見送ると、照代は

「初めてお目にかゝつて、今迄お親しくもしてゐない私が、こんな事を申上げては、失禮でございますけれど、今伺つてゐて、大體の樣子はお察しが出來ましたが、この方は何處かへ御

奉公にでもゐらつしやるのですか。
お差支へなかつたら、御事情をお明し下さいませんか。
若し私共でお役に立つ事なら、お力添へを申上げますから……。」
照代から懇ろに言はれると、老人は非常に恐縮して、
「有りがたうございます。
少し事情がございまして、東京へ奉公に出す事になりました。」
「左様でございますか。東京の何方へお越しになるのでございますか。」
「それが普通の奉公でなく、人様にお聞かせするのも、お恥かしい様な、苦界へ勤めさせる事になりましたので……。」
照代はそれを聞くと、はつとして顔色を變へ、
「まあさうですか。お可哀さうに。」
と言つた聲が、娘の魂に強く響いたので、娘は驚いてはつと我にかへると、目を開いて、

自分の向ひ側に座つてゐる、美しい氣高い照代の姿を見ましたが、面白なさゝうに顔を赤らめると、又うつむいて終ひました。
父親は何の遠慮もなく、無造作に話し初めました。
「實は私共は、宇都宮在に住んでゐる、誠に貧しい百姓でございます。
昔はそれでも、どうかかうか、眞面目で働けば、家内中食べて行けるだけの德はありましたが、子供が七人も生れまして、うちの生活も樂でありませんので、この子は十四の年から東京へ稼ぎに出て貰つて、今迄うちを助けて貰つたのでございます。
所がこれの兄といふのが、二十五になるのですが、非常に極道者で、若いうちから惡遊びを覺えまして、散々親を泣かせた上、三年前、あちらこちらに、澤山借金をしておいて、何處かへ行つて終ひました。
未だに葉書一本寄越しませんので、生きてゐるやら死んだやら、どうしてゐるのか皆目分りません。

所がその極道な悴が殘して行つた借金に責め立てられて、えらい難儀をして、先祖から讓り受けた田畑を賣つて漸く借金の苦勞は拔けましたが、こんな事を苦にした揚句、母親も床についてから三年、散々醫者樣にもかゝり、よいといふ藥を服んで手を盡した上、とう〳〵昨年の秋死んで終ひました。

そのために又澤山の借金を背負ひ込んで終ひました。

その上小さい子供を五人も抱えて、私も今迄の樣に稼ぎにも出れず、又人も雇つて呉れません。うちには百姓して食つて行ける程田畑も山もありませんので、かうしてゐれば、親子六人餓死するより外に仕方がございません。」

「まあお氣の毒な、

それでそんな狀態にお成りになつたのに、お助けしやうと仰有る樣な、御親戚もないのでございますか。」

「はい、親戚と申しましても、皆同じ樣な狀態の貧乏人ばかりでございますので……。

中には樂にやつてゐる者もない事はありませんが、人の困つてゐるのを見ても、助けてやらうといふ樣な心持は微塵も持つて居らぬ者ですから、賴る事もなりません。

何しろ親の代から、親戚の世話などした事もないのですから、仕方もないと思ひますが、全く困り果てゝ終ひました。

所が有難い事に、この子に相談しましたら、お父さんや五人の子供を生かすためなら、自分が死んだ氣で、苦界に身を沈め、纏つた金を作つてやるから、町へ出て小さな商賣でもして、生活の道を立てよと言つて呉れるので、親甲斐もなくその氣になつて、或人に賴んだら、私が世話してやると言つて、東京へ手紙を出して下さつたら、今の旦那が來て、娘をよく見て下さつて、この子なら三年二千圓位は前貸をすると言つて呉れます。

だがそんなに途方もない金を借りますと、この子が借金のために苦んで、長い事世に出られないだらうと思ひますので、一生懸命働いて、金が出來たら親許身受だと元金でいゝといふから、私は元金だけ稼いで持つて行つて、娘を貰つて歸へらうと思つて、五百圓だけ金を御無心

言ひました。

それで今日は向ふ様迄送り屆けて、よく旦那様やおかみさんや、始終お世話になる朋輩衆に頼んで來やうと思つて、一緒に送つて行く所でございます。」

「まあ、さうですか。

何てお可哀さうな……。」

息づまる様に照代は言ひました。

「自分で言ひ出して、初めからしつかり覺悟してかゝつておいて、お父さん何も因縁だから、氣を大きく持てと慰めておき乍ら、いざとなるとかうして情無がつて泣きますのだ。

無理もない事だけれど、それだつたら初めから言ひ出して呉れなけりや、私も五人の子供を抱えてどうにもならなけりや、淵河へ入つてゞも、自分の身の始末はつけるから、無理に身を沈めて呉れと言ひはしないのですが……。」

と老人は話し終ると腰の手拭を取つて、涙を拭くのでした。

救ひの手を伸べて

照代は委細の話を聞くと、自分にも涙を拭いて、つと立上ると、父母の腰掛けてゐる横の席に近づいて、

「お父様、お母様、お願ひがありますの。

聞いて下さいませんか。」

國彦は突然照代にさう言はれると驚いて、

「照代、何です。急に改つてお願ひとは？」

「外ではございませんの。私に五百圓お金を下さいませんか。」

「五百圓お金が欲しいつて？　お前のあの方をお救ひしやうと思ふのか。」

「はい。お話を伺つて見ると餘りお可哀さうで、他人事とは思はれませんから、お救ひして上

げ度いと思ひます。
お父様お母様お聞きになりまして？」
「すつかり聞きました。」
「お可哀さうな方でせう。」
「本當にお可哀さうな方ですね、私貰ひ泣きしてゐましたよ。」
「世の中には、この方達の様に、いゝえもつと不幸な方が澤山生きて見えるのです。けれども、その人達をこちらから探し廻つてお救ひする事は、到底出來る事ではございません。
けれどもかうして偶然にお目にかゝつて、御事情を聞いた以上、お金でお救ひ出來る事なら、お救ひして上げるのが、義務ではないでせうか。
さうかと言つても、なければ仕方がございませんが、持合せてゐる者が、見て見ぬ振をしてお助けしないといふ事は神様のお心に背く様な氣が致しますから、お父様、お願ひ出來ましたら、救つて上げて頂き度うございますわ。」

と眞心を眼に集めて、一心に嘆願する我子の顔を見ると、國彦は一言半句も拒む心にはなれませんでした。
それに先程から様子を見てゐて、自分から進んで助け度いとさえ思つてゐた所ですから、突然ではなく、豫期した事が實現したといふ感じさえするのでした。
國彦は澄江を顧みて、
「照代があゝいふが……。」
「私からもお願ひ致します。」
「では出して上げやう。」
とにつこり笑つて、鞄を開きました。
そして軈てその席に歸つて來た、件の男に、禮儀を盡して話しますと、初めはあれこれと言つて、却々承知しませんでしたが、遂に照代の純情と氣品備つた兩親の世の常ならぬ眞心に動かされて、

「それでは五百圓は元金です。
その上調査料や迎へに來た費用といふものがかゝつてゐますから、それだけは頂き度いと思ひます。」
「承知致しました。御入費のかゝつたゞけは差出しませう。」
と更に八拾圓の實費を支拂ひ、更に拾圓餘分に出して、
「これは貴方の御慰勞といふ程の額ではございませんが、私の志ですから、煙草代としてゞもお納め下さい。」
と差出しますと、件の男は初めとは打つて變つた顏付になつて、
「どうも恐れ入りました。
かういふ事が因緣といふのでございませう。
どうかお父さん安心してつれ歸つて下さい。娘さんも體を大切にして、よくお父さんに孝行して下さい。

私はこれで失禮して、あちらの方の車へ乘換へますから……。」
と言ふと、そこ〳〵にその車内から出て行きました。
これが因緣になつて、そのまゝその親子を東京へつれて來ると、三日も同じ宿に泊めて懇ろに東京見物をさせてから、
「若し生活に困つて、思案に餘つたら、尋ねて來る樣に。」
と汽車賃迄出してやつて、故郷へ親子を返しました。
こんな事のために思はぬ費用は費しましたけれど、大きな功德を施した事を喜び合つて、三人は故郷へ歸つて參りました。

婿選び

照代は慈愛の父母と共に、神都に鎭ります皇大神宮を初め全國のあらたかな神社佛閣に詣で、

名所舊蹟を殘らず巡拜して、初夏に入つてから懷しき我家に歸りました。

年老いても尙元氣旺な祖父母は、眼を細くして喜び迎へました。

「おぢい樣、おばあ樣、只今歸らせて頂きました。

御機嫌よろしうございましたか。」

「おゝ照代、よく歸つた。

學校も卒業出來てよかつたな。」

「はいお蔭樣で、無事卒業させて頂きました。」

「おゝよかつた〳〵。それに今度はお父さんやお母さんと、方々見物して來てよかつたね。面白かつたかえ。」

「はい、尊い所や美しい所や、名所舊跡を見せて頂きまして、本當に參考になりましたわ。

これから又方々のお話を時々お聞かせ致しますわ。

でもおぢい樣もおばあ樣も、何處も彼もよく御覽になつて御存じでゐらつしやいますわね。」

「いや、知つてはゐても、年寄が見たのと、若い者の見たのとは趣きが違ふから、又時折ぼつ〳〵と聞かせて貰ひませう。」

澄江は喜んで、

「今度は、長い間方々を見物させて頂きまして、本當に愉快な旅をさせて頂きまして有りがたうございました。」

國彥は笑つて、

「何を言つても、三人のうちでは、照代が一番學者ですから、よく說明して呉れて助かりましたよ。」

と冗談のように言ひました。

「あらお父樣あんな事仰有つて……。」

「いや、これからは年寄よりも若い者の方が物知りでなくちや、世が渡つて行けぬ。

まあ若い者にごし〳〵敎へて貰つて、老人も上手に世渡りする事だよ。」

「それに日光からの歸りには、生きた聖者の道を照代からはつきり敎へて貰ひましたよ。
お蔭に懷にこたへる程の小遣をねだられたりして……あはは、、、。」
「あらお父樣、あの事を仰有いますの？
だつてお父樣、あの場合は、あゝするのが當然の處置ではございませんでしたでせうか。
よい事をしたとはお思ひになりません。」
照代は眞面目になつて、首を傾けて父に確めるのでした。
國彥は笑ひ乍ら、
「よい事をさせて貰つたとは思ふけれど、始終あんな事に遭遇すると、うちの身代は直きに片付いて終ふと思ふね。」
父にさう言はれると、照代は
「本當にさういふ事も考へなければなりませんわね。
だけどよい事をした爲なら、財產を無くしても、御先祖樣はお喜びになりますわね。」

「御先祖樣はお喜びになるかも知れないが、子孫が生きて行かれなくなるのではないか。」
照代は父の言葉を聞くと、ぢつと考へてゐましたが、
「お父樣、私はこの家を相續する資格なんてないですわね。」
國彥は驚いて、
「何故そんな事を言ふの？」
「だつて私、さういふ風に泌々思ひますもの。」
「だつて外に子供はないんだから、お前に相續して貰はなければ困るじやないか。」
「だけど私、この家を相續して、子供を生むなんてこと、出來ない人間の樣な氣がしますわ。」
祖父母はそれを聞くと驚いて、
「照代お前そんな事を言つては困る。
お母さんがこのうちへお嫁に來てから、八年もの間子供が出來なかつたので、欲しい〳〵と念願して、漸く授かつたお前なのだ。

お前の生れた時の喜びはどれ程とも知れなかつた。
近所の人も親戚の人も、これで八幡の家も大丈夫と、喜び祝つて呉れたのだつた。それから今日迄十八年間、私もおばあさんもお父さんもお母さんも、お前の體を引伸す樣に思つて待つてゐたんだ。
お蔭でお前は體も丈夫で、女學校も無事卒業して歸つたのだからいよ〳〵この秋はお婿さんを迎へて、可愛い〻赤ちやんでも生んで呉れ。
私等も長生をしたから、いつ死んでもい〻のだが、慾を言へば、お前のお婿さんを迎へ、曾孫の顏を見てから、死に度いといふ樣な慾の深い事を考へて樂んでゐるんだよ。」
「本當にさうでございますわ。
長い間どんなに心配して待つて頂きました事やら、全く一通りの御恩ではございませんでしたのですから……。」
この時は冗談の樣に、これだけの話が出たのでした。

その中或時東京の知人から、手紙と寫眞が届きました。
國彥夫妻はそれを見ると、祖父母にも相談した上で、照代を國彥の部屋に呼びました。
照代は何事かと思つて、早速父の部屋へ參りました。
「お父樣、何か御用でございますか。」
「照代、お前に一寸相談し度い事があるから呼んだのです。
こちらへ入つてお出で。」
「はい。」
と答へて、照代は靜かに兩親の坐つてゐる机の前に來ました。
國彥はいつもより嚴肅な態度で、前においた寫眞を取つて、照代に示し、
「お前この人誰だか、覺えてゐますか。」
照代は示された寫眞を手に取ると一目見て、
「知つて居ります。」

「誰ですか。」
「これは廣島の八代友彦といふ方の息子さんで、東京の青山の福島さんのお宅から、帝大の理財科へ通つてゐらつしやる八代高之さんといふ學生の方でございます。
先達福島さんのお邸でお目にかゝり、御一緒に御食事を頂いた方でございませう。」
「さうだ、よく覺えてゐるね。」
「一度お目にかゝつた方ですもの。
はつきり覺えてゐるのは、當然でございますわ。」
「それはさうに違ひないけれど、お前の樣に親の名から、息子の學校の事迄覺えてゐるなんて感心だよ。」
澄江は傍から
「照代、あの方はお體格も立派だし、氣品も備つて何處となく凛々しい、しつかりした方ではありませんか。」

「さうでございましたわね。私餘りよく記憶して居りませんけれど。」
「まあお前は、お名前から總ての事を、はつきり覺えてゐる癖に、御本人がどんな方かといふ事は、覺えてゐないといふのかえ。」
「でも私、餘りよくお見上げしなかつたものですから。」
「それならそれでもいゝんだけれど、この寫眞で見ても、隨分容姿も調つて立派な方じやありませんか。
貴女この方をどう思ひます。」
「どうつて仰有いますと？」
「實は照代、おぢい樣やおばあ樣も、御心配下さつてゐらつしやるししますから、早く貴女にお婿さんを迎へ度いと思ひますの。
この春貴女が女學校を卒業した時に、方々見物しながら、東京へ行つて、福島さんにお願ひして、八代さんの息子さんを御紹介頂いて、逢はせて頂いたのもそのためでしたの。

その後こちらも、先方様でも、充分調査しました所、誠に申分のない御家庭で、御血統もいゝのです。

そして御本人も非常に頭がよく、眞面目な方でお體もお丈夫で、品行も至つて正しい方だといふ事が分りました。

だから貴女さえ承知して呉れゝば、お約束して頂いて、今年の暮にでも、結婚式を擧げ度いと思ふのです。

だから貴女の心持を聞いて見て、決めやうと皆様が仰有るのですよ。」

照代はそれを聞くと、春頃夢の様に父母や祖父母に聞かされた事が、今や事實として、目の前に現はれて來た事を思ふと、驚かずにはゐられませんでした。

結婚!! 人妻!! 母!!といふ様な事を、思ひ浮べて來ると、自分とは全く關係のない事の様に思はれて、兩親の熱心な問にも、眞面目になつて答へる事の出來ない自分を、どうする事も出來ませんでした。

「貴女の本當の心持を、遠慮なく言つて御覽なさい。」

と母から尋ねられますと、照代はにつこり微笑んで、

「私の本當の心持と仰有いますのは、この方と結婚する心持になれますかつて仰有るのですか。」

「さうですよ。」

「その事なら私……暫く考へさせて頂けませんでせうか。」

「それはすぐ返事をする様につて言ふのではないのですけれど、自分の心持位は分るでせう。」

「はい。」

「この方に逢つた感じはどうでしたの?」

「別にどうつて深い印象はございませんけれど、お父様やお母様が御立派な方だとお思ひになつたのでしたら、その通りの方でございませう。」

「そんな張合のない事を言ふものじやありません。

貴女の感じを聞いてゐるのですのに。」

「澄江、そんなにくどく言はなくてもいゝよ。
照代が考へてから返事をすると言へば、それでいゝじやないか。
ではゆつくり考へた上で、お前の本當の心持を聞かせてお呉れ。
今日明日といふ程急ぐ事ではないのだから……。」
「はい。ではよく考へましてから御返事致しますわ。」
と兩親の前を辭して、照代は我が部屋へ歸りました。

離れ行く心

その日から、祖父母や父母が、養子問題の事で色々な噂をしたり、まだ見ぬ孫の話迄するのを聞くと、照代は何とも言はれない、空虛な心持になつて終ひます。
獨りになつて靜かに考へれば考へるほど、照代の心持は、祖父母や兩親の心持とは、反對の

方向へ歩いて行くのでした。
東京の町で見た、男女學生の姿、體格、魂の表はれ、言葉の遣ひ方、眼の色、女性男性交る〳〵が、照代の目にはつきり映つて、時には幾人かの學生の生活の有樣などが、一度にはつきり目の前に浮んで來ます。
父母が一心に自分の養子にと侑めてゐる、八代高之その人も、表面は申し分のない學生に見えますが、その魂の生活、裏面の生活を眺めると、我が夫として、眞心から侍づける人とは思はれません。
その他何處を見廻しても、この人なればと、心から信じて、一生苦樂を共にする事の出來る人が、この世の中の何處に生きてゐる樣にも思はれませんでした。
それのみか、總ての社會を隈なく見渡す時、人間の社會ほど表裏があり、上下があり、幸と不幸の差別が多く、魂の生活とその支配に依つて現はれてゐる生活狀態の複雜して居り、又その魂の力に依つて、お互に果しもなく、惱み合つてゐる世界はありません。

これを目の邊り見ます時、照代は思ひました。

「こんな浮世に生れ、この惱ましい人の生活の有樣を外所に、自身だけ何の不自由も不幸も知らず、平凡に一生この命を最後迄生かせばよいのだらうか。

私はそのために、この世に生れて來たのか知ら？

尊敬する事の出來ない夫を迎へ、その人に從つて、子供を生み、さうして年老いて死んで行く。

それが私の運命だらうか。」

と思ふと、何處からか、

「迷つてはいけない。

お前の運命は、そんな平凡な生活じやない。

大きな使命を持つて生れて來てゐるのだ。」

と魂に囁く聲が、天から地からはつきり聞える樣な氣がします。

はつと驚いて、眼を開いて、邊りを見廻しても、誰もゐません。

こんな事が幾日か間斷なく續いてゐる中に、照代の心は、次第に一大變化を起して、懷しい生れた家、慈しみ深い、祖父母父母の膝元に落着いてゐる事の出來ない心境になつて終ひました。

神風

九月十八日、八幡神社の祭禮の日です。

今年は里も豐年、濱も豐漁だつたので、元氣よく豐年祭を行ふために、朝から賑やかな笛や太鼓の音が響いて來ました。

八幡家へも、他村から澤山のお客が招かれて、却々忙しうございました。

お晝にお祭のお振舞がすんで、親戚の者がお宮へ行つたり歸つたりする迄は、照代は母の手

傳ひをして、まめやかに働いてゐました。
その態度は平常と少しも變つた事はありませんでした。
少し手が空くと、澄江は
「照代、忙しい思ひをさせてすまなかつたね。
後は、はると私とで片付けるから、着物を更へてお宮へ行つて、お參りしてゐらつしやい。」
と言ひました。照代は嬉しさうに、
「ではお母様、やらせて頂きますわ。」
といそ〳〵として支度をして、
「おぢい様、おばあ様、行つて參ります。
お母様、では一寸やらせて頂きます。」
と言つて出て行きました。
軈てお宮では祭典もすみ、村人は三々五々歸つて行きます。

邊りがたそがれて來て、お宮の森がしんとしてからも、照代は歸つて參りません。
うち中の者は心配し初めました。
「照代はどうしたでせう。
お宮には誰もゐなくなつたでせうに。」
「お宮なんかに今頃ゐるものか。晝間でもお宮では見なかつた樣に思ふよ。」
國彥と澄江は心配氣に話し合ふのでした。
「でも貴方、お宮へお參りして來ると言つて出掛けましたのですから……？。」
「私はずつと社務所に詰めてゐたが、つい見かけもしなかつたよ。」
「では誰かお友達と逢つて、外へ出掛けましたでせうか。
でもあの子は今迄そんな事は一度もございませんでした。
第一何處へ參りましても、日が暮れてから歸つた樣な事は一度もございません。」
「萬一の事があつては大變だから、近所の人に探して貰はうじやないか。

國義も不安氣にさう言ひ出しました。
「さうでございますね。では私が賴んで參ります。」
信江は憂はしげに出て行きました。
軈て近所の人、出入りの人達が手を分けて、島中探し廻りましたがついに姿を見かける事は出來ませんでした。
澄江と信江は體を戰かせて心配し、
「誰か惡い人に浚はれたのじやないでせうか。」
「そんな事もないだらうが、よく山が好きで、深入りする子だから、遲くなつて急いで歸らうとしたはづみに、崖からでも落ちたのではないか知ら？」
一家の不安は益々深くなりました。
改めて人數を殖し、提灯炬火を點して、山から濱から殘らず探しましたが、何の手がかりもありません。

翌日のお晝頃、村の青年が、息せき切つて、八幡家へ駈込んで參りました。
見るとその手には、照代の昨日着て出た晴着がしつかり抱えられて居りました。
澄江は一目見るなり、
「あつ?!」
と絶叫しました。
「その着物は？　何處にありました。」
「矢張りお嬢樣のですか。
八幡樣の奥の院の岩の上に載せてありました。」
「どうしたといふのでございませう。」
と言ひ乍ら、澄江がその着物を受取つて、
「確かにあの子の着物でございます。」
「着物を脱いでそんな所において、照代は何處へ行つたのでせう。

その邊りに居りませんでしたか。」
祖母の信江はおろ〳〵聲で尋ねました。
「私もその邊にゐらつしやるかと思つて、一生懸命呼びましたが、何の答へもありませんでした。」
「まあ、一體どうして終つたのでせう。あの子は？」
澄江は泣かんばかりに蒼ざめてゐます。
とばらりと落ちたものがあります。
國彦が急いで手に取つて見ると、紛れもなく、照代の書いた手紙です。
急ぎ封を切つて見ると、美しい筆跡で、
お父様お母様、
御祖父様御祖母様、
御慈しみ深い、海山の御恩に御報ひもせず、勝手に家を出まして、御心配をかけます不孝

の罪をお許し下さいませ。
私は少し念願の事がございまして、當分の間誰の目にもつかない、誰からも干渉されない世界へ行つて、思ふ儘心の修行をして見度くなりましたので、家を出ます。
又歸り度くなれば、その時に歸つて參ります。
ですから御心配してお探し下さいませぬ樣、私はどんなに探して頂いても、人の目につく所には居りません。
そして今一つ申上げておきます事は、私は八幡家を繼ぐために生れて來た子ではありません。
八幡家を相續する子は、來年六月にお母樣のお體から生れて參ります。
その子は玉の樣な男の子でございます。
私の代りに大切に育てゝ下さいませ。
屹度うちのためにも、村のためにも、君國のためにもなる、よい子でございます。

とこんな不思議な事が書いてありました。

みんなが呆れて、

「一體これはどうしたといふのだらう。

「何處かへ神隱しにでもなつたのか。」

「何か化性の者にでも欺かれて、何處かへ誘はれたのではないだらうか。」

「それにしても男の子が生れるなんて、不思議な事が書いてあるね。」

「本當ですわ。若い時なら兎も角、四十五にもなつた私が、子供を生むなんて、想像も出來ない事です。」

こんな不思議な遺書と、着てゐた着物を殘して、姿をかくした照代は、その後幾日探しても、山にも海にもその影は見えませんでした。

一時は傍の見る目も哀れな程、嘆き悲んだ祖父母も父母も、日が經つと幾分諦めたのか、十八日を立ち日として、照代の冥福を祈つてゐました。

その中不思議な事には、母の澄江は、姙娠の兆候が現はれて參りました。

しかし照代が生れてから、十八年もたつてゐるし、四十六にもなつてから、赤ん坊が出來たといふ事も變な氣がするので、冬中は厚着を幸ひ、その體が人目に立たぬ樣に心を使つて居りましたが、六月になると、玉の樣な男の子を出産致しましたので、人々は照代の豫言の的中したのに、今更乍ら驚嘆致しました。

「まさかと思つてゐたのに、本當に玉の樣な男の子が生れた。」

「照代の言つた事がぴつたり當つてゐる。

あの子が母の體内に子供を置土産にしておいて行つたのでせうか。」

「まさか神樣ではあるまいし、そんな事が出來るものか。」

「だつて書いてある事と、ぴつたり合ふのだから、不思議ではありませんか。」

「さうですね。矢張りあの子は、生れる時から、不思議な靈夢に依つて生れ、當り前の魂の子ではなかつたから、普通の人の樣に、世の中にゐて、養子を貰つて、子供を生むといふ樣な事

は、好まなかつたのでせうか。」
「それならその様にはつきり言へば、無理に養子を迎へ様とはしないのに……。」
「今ではさう言つてゐるけれど、考へて見るとその當時は、朝から晩迄うち中の者が、養子の事で夢中になつて、照代の心を無理に動かして、承諾させ度い様に言つてゐたんだからなあ……。」
「さう言へばさうでしたわ。矢張りそれが厭さに、家出をしたのでせうか。」
「あの子は今でも生きてゐるだらうかねえ。」
信江は男の子の生れた嬉しさの中にも、照代のゐない悲しさに、涙をこぼしてゐるのでした。
「本當に風のたよりもないのですから、どうとも見當もつきません。」
かうしてうち中寄りさえすれば、照代の安否を氣遣つて、涙するのでしたが、今では男の子が生れて、すく〳〵と育つてゐるので、紛れるともなく紛れて、照代を失つた悲しみも、薄紙を剝ぐ様に薄らいで行くのでした。

玉の様な赤ん坊は、丸々と肥つて丈夫に育ちます。
名は國安と付けられて、家中の寶物となつて成人して參りました。

聖女の魂

一方照代は祭の日に、母に勸められると、普通のいでたちで家を出ましたけれど、母に見付からぬ様に、豫て用意しておいた、白無垢を家から持出してゐました。そしてわざと八幡神社には參拜せず、細道を分けて三十丁も山の峯にある、八幡神社の奥ノ院に參りました。
こゝは人里も遠く離れてゐますので、午前中に神官や村の人達がお供へ物を持つて、下山してからは、本當の信仰のある人が、五六人お參りしたゝけで、午後はしんとして誰も通りません。
照代はその道を夕日に照らされ乍ら、靜かに昇つて參りました。

さうして八幡様の社殿へ參りまして、着物を脱ぐと、片畔りの小川で體を淨め、持つて上つた清淨な白衣に更へて終ふと、着て來た着物はきちんと疊み、袖に手紙を入れて岩の上におき、その上に洋傘を載せました。

そして社殿の前にきちんと坐ると、兩手を合せ、

「畏くも尊き八幡大明神。

願はくは我身を生來の使命の道に、迷ひなく導かせ給へ。」

と一心こめて祈つてゐました。

すると次第々々に日が暮れて、夕景が迫つて參りました。

山はしんとして音もなく、塒にかへる鳥の羽搏きや、そよ吹く風に葉ずれのする音が聞えるのみです。

社殿は森閑と靜まり返つてゐます。

照代の心はいよ〳〵澄み切つて清々しく、無我の境に入りました。

とその時、そよ〳〵と清々しい神風が吹いて來たと思ひますと、何處から來たのか、南天の木を杖についた、銀髭を胸迄垂れ、眞白の總髪を後に下げた、眼光輝かしく鋭い、齡も分らぬ程の老人が現はれました。

照代は驚いて、聲をかけ樣としましたが、聲が出ません。

翁は嚴かに

「乙女よ。汝の願ひに依つて、今から魂の世界へ導くであらう。」

照代は心で一生懸命に、

「貴方樣は誰方樣でございますか。」

と尋ねると。

「我は八幡大明神の御使じや。」

と言はれたと思ふと、忽ちその邊りに白雲が滿ちて參りました。

老翁は照代を抱えて白雲の上に載ると、忽ち社殿を離れて、虛空を飛び初めました。

それからどれ程時間がたつたのか、どちらを向いて走つたのか、照代はちつとも知りませんでした。

靈峯の月

聽て照代が我にかへつて、眼を開いて見ると、幾山越えて來たのか知れない程、深い山の峯が、眼下に見えます。

里も海も見えません。

眼下を見れば、幾千丈の谷底で、邊りは名も知らぬ木が、切立つた樣な岩石の間に立つてゐます。

それこそ動物はおろか、鳥も通はぬ深山の靈峯で、我が身は一番嶮しい、岩の上に置かれてある事が分りました。

邊りには鳥獸の聲もしなければ、もとより人の聲は聞えません。

何處を探しても、燈火といふ樣なものは、何一つ認める事は出來ません。

何とも言はれない風が、ごう〳〵と峯を吹き拔いて參ります。

照代は今更の如く驚いて、

「あゝ私はいつの間にこんな所へ來たのだらう。」

すぐ先程迄の記憶を思ひ出しました。

「八幡樣の奥ノ院で、お詣りしてゐる時に、白髮の仙人が八幡樣のお使ひだから、私を導くと言つて、つれられて虛空に飛上つた迄は覺えてゐるが、それから後の事は全く分らなかつた。

私はあれから何時間空を飛んだのだらう。

こゝは何といふ山だらう。

もう私は浮世から魂が離れたのか知ら？

それともこゝも浮世のうちか知ら？」

と考へて見ても魂が朦朧として終つて、浮世にゐた時の様に、はつきりと靈能力が働きません。
「それにしてもあのおぢいさんは、私をこゝにおいて、何處へ行かれたのだらう。」
と思つて周圍を見廻しても、それらしい人の影も形も見えず、聲も聞えません。
「あゝ本當に私は、一人限りの世界へ來たんだ。」
と思ふと、言ひ知れない哀愁に、たまらない淋しさを感じて、岩の上に坐つてゐました。
すると忽然として、空の雲の上から、滿月が皎々と現はれて、照代の坐つてゐる山一面に照しました。
照代は餘りの嬉しさに狂氣した様に、
「おゝ御空のお月様。」
と叫ぶと、不思議に
「おゝ。」
と答へた様な感じがしました。

と不思議に、すぐ目の邊りに、美しい女神が現はれて、
「照代お前はこれからは、こゝで暫く魂の行をするのです。
私がいつもついてゐるから、心配する事はありません。
お日様が西の空にお歸りになると、お月様が東の空から上つてお照しになる。
お日様もお月様も、御空に輝く、あの澤山のお星様も、みんなお前を守つて居られるから、
少しも淋しい事はありません。
落着いて、魂の行をするのです。
お前が心で呼べば私はすぐにこゝへ來ます。」
と言つて消えて終ひました。
照代はこの姿を拜み、お聲を聞くと、心が大磐石の様になつて、淋しいといふ様な心持は、
微塵もなくなつて、その代り樂しい清々しい心持になりました。
岩の上に坐つて、よい心持でゐます中、幾時かの後に、白々と夜が明けかけると、東の空か

ら大きな眩しい眞赤な太陽が昇つて參りました。

照代は餘りの嬉しさに、思はず合掌しますと、不思議や御光りの中から、輝かしい天女がさつと飛出して、照代の坐つてゐる岩の上に來て、神々しく輝いたと思ふと、消えて終ひました。

かうした事があつてから照代は、太陽の輝く晝も月の夜も星の夜も、雨の日も風の夜も、唯嬉しく樂しく、魂の修行を行つてゐました。

その間絶えず女神は現はれて、色々な木の實を持つて來て、食べさせて下さいます。

時には何處からか、お餅やするめや果物などを持つて來て、

「これを食べなさい。」

と侑めて下さいます。

又或時は

「谷へ下りて草を摘みませう。水を呑んで來ませう。」

と誘つて下さいます。

そんな時は何千丈といふ崖も女神はする〳〵と下りて行かれますが、照代は藤蔓に摑まつて怖々下りて行きました。

その中に次第々々に日がたつと、恐怖の觀念が消えて、樂々とどんな谷底へも下りて行かれます。

艫て足や手を、岩や藤蔓にかけないでも、樂々と自由に下りて行つたり、高い木に登つて、木の實なども取れる樣になつて參りました。

照代は自分でも、

「私は確に生きてゐる。

體があるのに、こんなに自由な働きが出來るのは、どう考へても不思議だ。」

と思ひました。

しかし魂の行が進むにつれて、實に不思議な靈界に魂が飛んで行つて、想像も出來なかつた、美しい世界を、次から次へと見る事が出來まして、今更の樣に驚嘆致しました。

「あゝ、私も今迄浮世の外に、こんな美しい輝かしい世界があるとは知らなかつた。」
人間の靈の納る靈界その他、あらゆる世界を隈なく見盡した照代は一人で思ひました。
「浮世に生きてゐる、何千何萬何億といふ人達は、可なりはつきりした智恵も力も持つて生れ乍ら魂の鏡が曇つて、地上に住む魔神の朦氣に禍され汚されてゐるために、こんな靈界のある事も知らず、生れて來た故郷も、これから進んで行く未來も知らず、唯目の先の事ばかりに囚はれて、自我の妄念のために、お互に苦しみ合つてゐるのだ。
あゝ可哀さうな。何とかして浮世の人の魂にかゝつて、心の鏡を曇らせてゐる、朦氣を清め去つて、靈界のはつきり見える樣に、魂を救つて、健やかな體にして樂しく生かして上げ度い。
どんなにしたなら、總ての人を救ふ事が出來るだらう。」
と泌々考へ初めました。
だが幾ら考へても、考へれば考へる程、益々分らなくなつて、折角清められた心さえ身さえ、底知れない世界へ落ちて行く樣に思はれます。

この時天人は現はれて申しました。
「お前は唯、潔く清々しき魂の行をすれば、それでよいのです。
物に囚はれると、魂が曇ります。
又邪念がかゝります。
唯潔く清々しく、一心一仰行を進めなさい。」
と戒められます。
かくして八年の星霜は、この深山の靈峯に過しました。
その間海を越え山を越え、想像もつかない深山靈峯に移されて、魂の行を積まされました。
照代はいつとなく、魂が澄み切つたのみでなく、肉體は忽ち、空氣よりも輕く、虚空に向つて、雲を呼べば、忽ち白雲がその周圍に集つて參りまして、それに乘れば何處へでも思ふ儘に飛行出來る樣になりました。

滿つる白雲

清々しく晴れ渡つた大空に、月の光美しい夜でした。照代は大空を眺めてその魂は星と戯れてゐると、いつの間にか女神が現れて、

「照代!!　照代!!」

と呼ばれます。

「はい。」

と答へて、照代は美しい瞳で、女神の輝く姿を見上げると、女神は微笑まれて、

「御身の魂の行は終つたから、今からは自身の魂の力だけでも、月の世界星の世界海の世界その他人類の住む所住まない別世界へも行く力が出來たけれども、御身はまだ、地界に生れた人としての體と、使命を持つてゐます。

これからは地界にある人類の生活を明らかに知つて、最後の使命を果さねばならないから、今からは地界へ行くのです。」

「こゝは天界でございませうか。地界でございませうか。」

「今迄御身が行をしてゐたのは、世界の靈峯で、天上界と下界との境にゐて、魂が天上界に通ずる、行をしてゐたのです。

だから御身は今から自由に、天上界の何處の世界にも、行く事が出來ます。永遠に天上界は、御身の故里であります。

けれども假の世である地界は、天上界と變つて、魔神がはびこつて、人間の魂を曇らせ光を奪つて闇路に迷はせ、その身に過ち罪を行はせるために、患ひ苦惱を生じ、不幸な狀態となつて、お互に自我の心に囚はれて、物凄い爭ひを續けて暗黑無明な世の中に、苦惱を續けてゐるのです。

ために天祖樣は、天つ神をお降しになつて、魔神を滅し、人類の心の曇りを清めて、眞澄の

鏡として、五體を照らし、清き正しき行にかへらせ、健やかな命に改めて、地上人類萬物の生命の幸福と平和のために、御威稜を輝かされる事になつてゐるけれど、天つ神直接の御力を人間の世に現はす事は出來ないため、神の器として御身の魂と身を清め給うたのです。御身は今から天つ神の御器として、地界にかへり、天祖の御心をそのまゝ地上人類の魂に身をうつして、清めの業を成就し、誠からなる幸福の種をうつすのです。」

「はい。よく分りました。

では只今から、地界へ歸るのでございますか。」

「地界へ歸るのですが、先づそれより天が下の國々を尋ねて、その人類の生活を見て、總てを悟る事が大切です。

そのために今から御身を伴つて見せて上げませう。」

と言はれると、忽ち白雲は周圍に滿ち〳〵て參りました。

照代は女神と共に雲上の人となりました。

今は八年前と異り、生き乍ら雲より輕い我身になつてゐますので、心樂しく清々しく、澄み切つた虛空の中を、驚くばかりの迅さで、走り初めました。

雲上の旅

照代は長い間深い谷や森林、又曠野の上を走つて行きました。

軈て雲の間から、地界を覗いて見ますと、きら〳〵と何か光つて見えます。

女神は、

「あれは人間の集つて住んでゐる、町の燈の光りです。

あの國はお前の生れた、日の本の國ですよ。」

「では私は今日本の空を飛んでゐるのでございますか。」

「さうです。世界一聖い、美しい、尊い、天祖樣の御稜威の輝いてゐるお國の上です。」

「この天が下の世界で、日本より麗はしい國はございませんか。」

「あるだらうか。ないだらうか。

試みに見て廻ると明らかに分ります。

もう今からは陸を離れて、海の上を飛びます。」

と告げられました。見るといつの間にか、今迄の陸も光りもなく、果しなく廣い海の上を飛んでゐます。

耳を澄すと、靜かな中にも、風に動く波の音が聞えます。

所々に小さな舟が浮んでゐるのが見えます。

さうかと思ふと、又大きい島小さい島が幾つか見えてゐます。

それのみか、海の水面を思念して見凝めると、聽て靈眼がはつきりして參りまして海の底迄見えて、海底に生えてゐる、樣々の海藻や岩石が見え、又所々に水中に落ちて海底に沈んでゐる、色々の物が見えます。

又大小樣々の魚や海獸などが、游いでゐる樣が見えます。

照代が面白さに夢中で眺めてゐると、女神は微笑まれて、

「海の世界ばかり見ないで、天界を御覽。

美しい御空に、天人天女があんなに樂を奏でゝ、樂しさうに舞を舞つてゐられます。」

と言はれますので、海から目を離して空を見上げると、きら〳〵として星が瞬いてゐる中を、大勢の天人天女が、嚴かな樂を奏でつゝ、羽衣をひら〳〵となびかせ乍ら舞を舞つてゐらつしやいます。

餘りの美しさに、照代はじつとそれに見惚れてゐますと、天女はこの時美しい聲で仰有いました。

「昔は天上界と地上界と、全く別々に離れてゐたが、今では神の子人間の智恵で、飛行機といふものが發明されて、地上から離れて空間を飛んで、陸の上、海の上を自由に飛んで、何處へも行く樣になつたから、地球上の事だけは何でもすぐ分る樣になりました。

それに人間の力で、電話電信ラヂオといふ様な機械を作り、宇宙に滿ちてゐる、天祖様の靈氣を受けて、働かせる様になつたから、世界中の事は目に見える様に、又手に取る様に分ります。人間は賢いので、魂を曇らせずに、正しく働かせると、どんな力でも發揮するものです。」

「女神様。人間はこの先魂の曇りを取ると、どれ位の力を發揮致しますでせうか。」

「數千年の後には、人間は月の世界、星の世界へも行く力が出來るでせう。

もと〳〵人は天界から生れた、天祖様の生みの子だから、魂を汚さず、磨いて、靈力が光り輝くと、どんな光も備つて來るから、人間の力で出來ない事はないのです。

現にお前は地界の人間に生れ、肉體を持つてゐ乍ら、魂の行をしたゝめに、魂が眞澄に清められ、澄み切つたゝめに、肉體をそのまゝ瓦斯體にして、雲に乘つて飛んでゐるではないか。」

「神様、私だけでなく、地界の人は誰でも魂を清めて、眞澄にすれば、總てその體は瓦斯體に變つて、雲を呼んで虚空が飛べますか。」

「それは出來ます。

昔から地上に生れた人で、魂の行に依つて、虚空を自由自在に飛んだ人は日本にも幾人もあるが、世界各國にも澤山あります。

少しも不思議な事はありません。」

「でも肉體がどうして、雲より輕い瓦斯體になれるでせう。」

「それは、何の不思議もない。

雲は水蒸氣の集りだけれど、人間の體は、もと空であつたのが、色々の諸成分から、肉體として組織されたものです。

だから普通の人として、下界にゐれば、肉體が主體の様になつて、魂は目に見えず、有るかないか分らぬ様に思はれるが、魂を清めて、眞の眞澄の鏡の様になると、體を消滅して、瓦斯體とする事が出來ます。

ためにどんな所へでも飛んで行く事が出來るのです。

これを不思議に思ひますか。」

「はい、不思議に思ひますが、神様の仰有る事を伺ひまして、自分でもよく考へて見ますと、よく分ります。」

下界の姿

「神様、それを思ひますと、地上の人達が可哀さうでなりません。

結構な力を、天祖様から頂いて生れ乍ら、魔神のために魂を汚し曇らせ、光を奪はれて、天上界に通ずる力は愚か、地上に人として生きる正しい力さえ失つて、絶えず身を煩ひ、心を苦しめ合つて、痛ましい生き方をして居ります。」

「それだから、人の命を清め改めるために、天つ神様が、お力を盡してお出で遊ばすのです。」

「それならば、天つ神様の偉大な御稜威で、地上にはびこつてゐる魔神の禍を消滅して、總ての人を不幸から、お救ひ下さる事が出來ないでせうか。」

「形なき魔神は、神の力で取除けるのですが、人の體を奪ひ、その體にゐて、禍をする魔神を取除くには、矢張り天つ神が眞澄に清めたる、人の體を器として現はれて、偉大なるその靈力で魔神を降伏させ、自滅させねば、人間の生命を完全な、眞に幸福な世界に救ふ事は出來ないのです。それがために、天つ神は地上のよき器を求め選び給うたのである。」

「よき器と仰せられますのは？」

「天祖の御聖意を受けて生れた、特別の天使は、唯見れば人の姿に現はれてゐても、魂を清めれば忽ちよき器となるものです」

「神様、仰せの事は分りましたが、私のこれからの使命は？」

「先づ天が下の世界の各地を巡り、あらゆる人類の生活に親しむ事です。」

「どんなにして、總ての人類に交り親しむのでございますか。」

女神は微笑まれて、

「それはいと易く、現身自滅變身轉化思ひのまゝです。」

「左様でございますか。
ではどんなに致しますと、變身が出來ませうか。」
「變身は何の術も必要なく、すぐ出來るのです。
それは唯かうすればよいのです。」
と仰せになつたと思ふと、今迄女神様であつたのが、八年前靈峯へ誘はれた白髪の老仙の姿に變つてゐます。
「あ、貴方は老仙様。」
「分りましたか。
瞬く暇に轉身出來るのが、神の力です。」
「まあ、それに致しましてもお懐しうございます。」
と言つてゐる中に、ぱつと一つ光つたと思ふと老仙は又もとの女神様に變られて、
「分りましたか。」

「はい。でも私はまだ一度も變身致した事はございません。」
「氣遣ふ事はありません。
ではあの地界の濱邊に立つてゐる人が見えるでせう。」
照代が下を見ると、二人の乘つた雲はずつと下つて來て、怒濤の打寄せる濱邊に近づいてゐます。
「こゝは地界の何といふ國でございませう。」
「これはアジアの沿海州の濱邊です。
これから段々とロシア大陸へ進んで行きませう。」
「ではずつと、シベリヤから、歐洲の方へ行くのでございますか。」
「さうです。世界の大きい國も小さい國も、殘らず海陸共に巡りませう。
御身は唯變つた國、變つた島、何處へ行つた時も、必ず地界に下り、その民族と交り親しむのですよ。」

「はい。」
と照代が神様とお約束すると、軈て白雲は地上に下りて神秘的な漁村の、人の住家の表に着きました。
照代は忽ち可愛らしい漁村の娘に變身しました。
すると言葉も自ら通じて、その邊の人々と自由に話されます。
照代はその家の中へ入りました。
軈て暫くこゝで住む事になり、同じ食物を食べ、飲物を呑み、物語りを聞き、踊りを覺えたりして、遂にはその地方の人達の、寶と尊ぶ物をも見る事が出來、すつかりその土地の樣子が分つて參りました。

變る風俗

照代が現世に在る中は、一行一句も書物にも見なかつた樣な、土地があり風俗があり、人種が住んでゐます。
照代は守護神樣に守られて、自由に海も山も陸も丘も、心のまゝに飛んで行けますので、何處の國の風俗をも、見落すといふ事はありません。
殘る方なく、その土地に下り、土民の姿に變じては、自由自在にその土地の人に親しみ交り、人情風俗習慣、生活の有樣の總てを明らかに見取つて參りました。
探れば探る程照代は、驚異の眼を見張りました。
世界地理や西洋史で學んだのは、多く大都會の事で、外の有樣は想像して見る事も出來なかつたが、今直接來て見ると、同じ天が下ながら、植物や氣候風土が、夫々に異つてゐるばかりか、人類の生活樣式風俗習慣の變つてゐる事は、唯驚く外はありません。
生れて來た、自然の儘で生きてゐるのは、大都會の文明人だけで、開けない奥地に參りますと、野獸とも人間とも、區別のつかない樣な人類が、裸體に等しい姿で、地上に泥の家草の家

を作つて住んでゐます。

毒蟲猛獸の多い所では、周圍幾丈ともいふ程の大木の、地上何十尺といふ所に、家を造つて、高い梯子をかけて住んでゐます。

何の缺點もなく生れた子供を、成年近くなると、怖ろしい形相になる樣に、文身をしたり、彫り物をして、傷けたり、鼻や耳に穴をあけて、輪や棒を通したり、顏の一部分だけを特に發達させたりして、それを誇りにしてゐる樣な野蠻な國民もあります。

熱帶地方に行けば、見るからに物凄い、猛獸世界があります。

かくして世界を次々に行くうちに、北極方面へ參りますと、次第に土地は寒く凍つて、人は住んでゐず、見渡す限り眩しい銀世界で、海は山の樣な氷で埋まり、動物と言へば白熊だけが住んでゐます。

かくして照代は、世界隈なく、都會も田舍も殘る方なく廻り盡しました。さうして世界の國々の民族の種類の多い事と、餘りにも珍らしい各地の奇習に、唯驚かされて終ひました。

變らぬ眞心

しかし照代は最後に、この世界一周大探險に依つて、何を掴んだかと申しますと、氣候風土人類風俗習慣、衣食住の總てが、國に依り所に依つて、皆夫々異つてゐるけれど、何處の國へ行つても、眞心だけは變つてゐません。

總ての事が分らない時も、眞心になるとそのまゝ何處の人とも意志も通じ、一時でもその間は、無上の幸福な生活がある事を知つた時、照代は初めて總ての人類の生命に授けられてゐる眞心だけは、天祖樣の御賜である。

それがために、一つ心に通じて、幸福を集める事が出來るものであるといふ事をはつきり知りました。

そして何處の國の民族も、この眞心をしつかりして、比較的曇らさないで、澄ませてゐる者

は、行ふ事も正しく、身も健かであるが、誤つて魔神に禍を受けると、忽ち急變して、過つた行を初めて、我をも人をも損ふ樣な事になつて爭ひを生じ、不幸な世界を作るといふ事を知りました。

何處の國の民族も、皆天祖樣の尊い靈氣を受けて生れ乍ら、總て皆魔神の禍に依つて、惱まされてゐる事を、目の邊りにはつきりと知りました。

照代は、天が下の何處の國をも總て皆知つて、その中に人の智惠の進んだ華やかな幾つかの國のある事を最後に見て知りました。

それに依つて、日本の國は、天祖の御聖意に依つて、天孫が天降され、世界の民族の生活を幸福に導き改め、御稜威を輝かされんために、天つ神を天孫の守護とし、又國つ神を民草として、神ながらに仕へまつる掟を定め給うた、天が下萬邦無比なる聖地神國である事を明らかに悟りました。

尙神國日の本にも、根强き魔神がはびこり、禍を生じ、その上に外國の汚れを受けて、民草の魂が汚れ曇り、誠の日の本の天孫民族としての光明鈍り、身に過ちを行ふがために、外國人にも劣らぬ不幸を心にも身にも生じてゐる事を明らかに悟りました。

かくして照代は、女神に導かれ、殘る方なく、總ての國と人とに親しんで、その誠の有樣を知り、明らかな悟りを得て、もとの靈峰にかへりました。

「これで御身は自身の使命を明らかに悟り得たでせうから、今からは下界にかへりて、思ふ儘力限り、生來の使命を盡しなさい。

我は諸々の天つ神と共に、御身の魂に添つて、御身の使命を助けませう。」

と仰せになり、祝福されると、再び照代をお載せになつて、殘る方なき神の御力をお授けになると、照代は靈峰を離れて、驀らに地界に向つて、天降つて參りました。

軈て照代がはつきり肉眼を開いて、立つてゐたのは、八幡神社の奥ノ院の岩の上でありました。

靈夢より醒めて

靈夢から醒めて、八幡神社の奥ノ院の前に立つた照代は、まるで夢に夢見る心持で、我身を見廻しました。

見ると自分はこの前、この社頭で着更へた白衣をそのまゝ着てゐます。

「一體どれ位年月を經たのか知ら？

或は今迄の事は、夢の一時であつたのか知ら？

私は生きてゐるのかゐないのか。

既にこの世の人ではないのかも知れない。

今迄の事を思ふと、夢にしては餘りはつきりし過ぎてゐる。」

と幾度か周圍の山々を見渡し、今更の如く八幡神社を見上げると以前と少しも變つて居りませ

ん。

この時照代は浦島太郎のお伽噺を思ひ出して、

「私はまるで浦島太郎の樣だ。

浦島太郎は龍宮へ行つてゐたのだが、私は天上界へ行つてゐたのだ。そして今の今迄世界を隈なく巡つて、異る景色、面白い風俗習慣を見、變つた人情の同胞と交つて來たのだ。」

と微笑み乍ら、

「野獸に等しい、野蠻民族の家にも寢た。

同じ食物を食べ、共に手を取つて踊りもし、歌ひもした。

ある時は高い樹上の家にも宿を借り、海上の家にも生活して見た。

無人島にも行つたし、世界の果、南極北極へも行つた。

凡そ天が下の國といふ國、人類の住む土地は悉く巡つて來た。

その樣子をはつきり覺えてゐる。

それでゐて私は今此處にゐる。
今迄私は一體どこにゐたゞらう。
富士山、木曾の山、日向の高千穗の峯などには確かにゐた。
その外名も知らぬ靈峯に次々にうつされた。
その外世界の名高い嶺には悉くうつされて行つた。
朝鮮の內金剛外金剛の頂きにも數日はゐたのだ。
最後の峯は何處だつたゞらう。
私は生きてゐるとしたならば、凡そどれ位の間、山の峯に生活したのだらう。」
と考へて見ましたが、どうしても分りません。
軈て落着いて考へて見ると、
「私はお祭の日に、お母樣に許しを受け、晴着に更へて、お參りに行くと言つてうちを出た。
その時家出をするといふ手紙を書いて、右袖に入れておいて、そのまゝ村の人々の集つてゐ

る本社へ寄らず、わざと横道を登つて、この奥ノ院に上つて來た。
さうしてこゝで着物を白衣に更へた。
自分では浮世離れた心持で、何處か修業の旅を續ける樣なつもりでゐたのだ。
そしてこゝに坐つて、じつと祈つてゐると、淸々しい神風が吹いて、ふと莊嚴な姿の老仙が
現はれ、私を抱えて忽ち雲を呼んで虛空に舞上つた。あゝそれ迄は確かに覺えてゐる。
それから氣付いた時は、あの月の淸らかな、美しい峯の岩の上に、この身は置かれてあつた
のだ。」
これ迄はつきり思ひ出すと、照代は忽ち今迄忘れてゐた、我家の父母祖父母の事を思ひ出し
ました。
「あゝ、お父樣お母樣はどうしてゐらつしやるでせう。
あの優しいおぢい樣おばあ樣は御無事なのか知ら？
私の家出した事を、どの樣にか御心配なすつた事だらう。

一刻も早く行つてお目にかゝり度い。
御無事なお顔が見度い。
だけどこんな變つた姿で歸つたら、みんなうち中の人がどんなに吃驚なさるでせう。
村の人達はもうすつかり忘れて終つて、何者かと驚くでせう。
それでもいゝ。何でもかまはないから、早く歸り度い。」
と思ふと、矢も楯もたまらず、いきなり八幡様の前に額いて、合掌し祈念してから、飛ぶ様に麓へかけ下りました。

懐しき家

來て見ると八幡様のお宮は以前の通り、大きな杉の木立の中に、神さびて鎮座されて居ります。

照代は懐しさの餘り、社殿に額いて參拜をすましてから、傍目もふらず我家へと急いで參りました。
家の中へ入つて見ると、上り口に七八つの可愛らしい男の子が、飛行機の玩具を持つて遊んでゐます。
異様な照代の姿を見ると、清らかな眼でじつと見てゐましたが、審しく思つたのか、
「お母さん、お母さん」
と呼びました。
照代はにつこり笑ひ乍ら近づいて、
「坊や、お母さんはうちですか。」
と尋ねますと、子供はいよ〳〵變に感じたのか、飛行機を捨てゝおいて、奥座敷へ飛んで入つて行きました。
其處へ丸々と肥つた、愛想のよい女中が、慌てゝ出て來て、

「坊つちやんどうなさいました？」
と言ひましたが、其處に白衣の見知らぬ若い女の人が立つてゐますので、審しく思つて、
「貴女はどういふ方ですか。
何か御用でございますか。」
と尋ねました。照代は笑つて、
「お母様はゐらつしやいますか。」
「あの、奥様の事でございますか。」
「え、さうですよ。」
「奥様なら、奥にお出になります。」
「お父様は？」
「旦那様もお出になります。」
「ではすみませんが、照代が歸りましたと、取次いで下さい。」

女中は不思議な事を言ふ人だと思ひ乍ら、入つて行つて、それと告げました。

父母の聲

「照代ですつて？」
と吃驚した様な聲が聞えたと思ふと、足早にこちらへ來る氣配がして、澄江が出て參りました。
「あら？　貴女は？　照代じやないの？」
「お母様、照代ですわ。御心配かけてすみません。」
「まあ、照代、よく歸つて呉れました。」
澄江は感極つた様に、
「貴方、照代が歸りました。」
と叫びました。續いて父の來る足音がして、

「お〻照代。本當にお前は照代だ。
よく歸つて來た。お前今迄何處へ行つてゐた？」
「お父様色々御心配かけてすみません。」
「そんなことはいゝ。
お前よく無事でゐられた。八年も過ぎてから、こんな姿で歸つて來るとは、夢にも思はなかつた。
一體どこへ行つてゐたのだ。」
「私、自分でも分りませんの。」
「お前自身で分らない事があるものか。」
「でも私、八幡様の奥ノ院迄行つた事は覺えてゐますが、それから先の事は覺えて居りません。」
「それではお前は、矢張り神隱しに遇つたのか。」
「そうなのかも分りませんわ。」

「それから後の事は少しも覺えがないのか。」
「いゝえ、よく分つてはゐますけど、お話しても お父様にもお母様にも分つて頂けないし、信じて頂けない事ですから……。
でも信じて頂けても頂けなくとも、一應覺えて居ります事だけは、お話申上げます。」
照代は着更を侑められるのも聞かずに、そのまゝ座敷へ坐つて、純眞に輝く眼で、父母を代る〳〵眺め乍ら、今迄の自分の生活を思ひ浮ぶまゝ、話して聞かせました。
聞き終ると兩親は驚いて、
「そんな不思議な話つて、この世にあるだらうか。」
と國彦が言へば
「でも貴方、八年間何處へも行かず、かうして無事に歸つた所を見ると、矢張りそうした世界に導かれて、變つた生活を續けて、尊い修行をさせて頂いたに違ひありません。
それにしても、もう二年貴女が早く歸つて呉れたなら、お祖父様やお祖母様も丈夫でゐて下

すつたのに、昨年の春と秋とに續いてなくなつてお終ひになつたのですよ。
貴女の事を寒いにつけ暑いにつけ、どれだけ御心配になつたか分りません。雨につけ風につけ、生きてゐるのか、死んでゐるのかと言つて、思ひ出しては、泣いてゐらつしやつた。
貴女がかうして歸つて來たのを御覽になつたら、どんなにお喜びになるか知れなかつたのに。」
「申譯もございません。
自分でもどうする事も出來なかつたのでございますもの。」
「それに違ひない。今更そんな事を言つたとて仕方がない事だ。
照代、落着いたら、お祖父様やお祖母様のお墓參りをして上げなさい。」
「はい早速參りますわ。」
「照代、おぢい様やおばあ様がお亡くなりになつて淋しい家になつたけれど、それに代つて喜んで貰へる事があるよ。」
「お母様、坊やが出來た事でせう。」

「さうですよ、お前が出て行つた翌年生れたのですよ。
實際思ひがけない事でしたのに。」
「それは照代の書置にもちやんと書いてあつたじやないか。
照代、お前どうしてあの時にあんな事が分つたのです。」
「分つた譯ではございませんけれど、私が家を出ると、この家を繼ぐ者がないと、お父様やお母様や、御祖父様御祖母様が御心配になるから、どうぞ後繼を授けて頂きます様につて、お願ひしましたら、來年六月必ず授けるからとの御知らせを頂きましたので、安心してあの手紙を殘して家を出たのでございますわ。」
「お前はどこ迄も不思議な事を言ふね。
家出をしない前でも、驚く程の靈能力があつたのに、八年も人の住む世界を離れて、世界の何處かで修業したとすれば、素晴しい靈能力が出來たのではないか。」
「私からその事は申上げられませんけれど、何れその中に分つて頂ける事と存じますわ。」

澄江は頷いて、

「さうですとも。貴女は初めから不思議な因縁に依つて、この家へ生れた人ですから、親だからと言つて、普通の常識で判斷の出來ない力を持つてゐます。だから自然に委せておいた方がいゝですよ。

坊や、これがお前の本當のお姉様なのよ。」

坊やは最前からの様子を聞いて、嬉しさうに照代を見守つてゐましたが、照代が、

「おゝ國安さん。よく大きくなりましたね。」

「僕にはこんな姉さんがあつたの？　母さん。

僕ちつとも知らなかつたよ。姉さん。これからはもう何處へも行かないでね。」

「えゝ、もうどこへも行きません。

坊やと、お父さんやお母さんに孝行しませうね。」

と二人は手を取つて喜び合ひました。

修養の巻